條約聞書抄 二之

ワ保3
3.359
2

門ワ保 3
3.359
2

條々國書

目錄

大酒の事 同席中一献の事
公方様御法度の事 御成の事
人乃相伴の事

貞丈

集古十種

温故堂書

三字下ケ

餘く圃書　貞丈抄并二

大酒の次第并一献の事

公私ともに一ぜんの酒の呑初めてとり入
両度又は今一ぜんなどと云て若き人々に勧め
只四ぜんまいの次第を両度と云ぜんの
間（あいだ）（あい）と云（いう）後（のち）のことを三献（さんこん）（ざ）と云
さうはづをもて小皿よりとりて口（くち）
先（まづ）最初（さいしょ）にそと上（うへ）の方（かた）の義（ぎ）をとりて口（くち）
能（よく）大酒（たいしゅ）をすゝめて歩（あゆ）と云（いう）歩（あゆ）
ゑん元（げん）せいの強（つよ）き人（ひと）をえらびて（つかはし）
るく座（ざ）をまはりて又（また）元（げん）の座（ざ）にかへる
```
```

人ハこゝろえつゞきいかゞ○でも尾張よりえいなお
少そのゆ國中より諸人の為神とうやまふ（サフラフ）ことなり
つゐに人のお酒ハ
○の出ハ先人の汚名（の出さま）
寺ハ住勝る貧家の法花
（うと何ふ）ことなり○上の四節文を何ものよしと
客人の助ハ客人又ハ主人の助ハ
御酒とうけいの招うつゞけて
又盃とあげ
べうびすゝとのこゝて下戸ハ
きそとゐへ
又うつぶくもろ〳〵他行よ
さ両よ両御の形とそとゐへ

（サフラフ）ふいつるや
○念仏
ふいつるや
○此節ハ
藤こ
つゐに人の助ハ
下戸ハ
吞ハ
又下戸ハ盃とそう
ふべし
ハ
ハ
ハ

らるべし但助ハ
ハ
ハ

一

ほかこそうよ出ると大方ハ次第ニ定ん乱酒となりて
よハ人の指図次第よおく〳〵すゑ迄ハよき夫人の四枚などのほハ
ゑ那ひておそくいて泊せやさしかるへし
○此こそうと云もの一ハ同一き人の四周廻り（めぐり）て四周半
（めぐり）出（いだ）すを通ふ一ハのきハ人の四ほう（めぐり）出（いだ）すを
とも此こそうと云や此る事ニ奉公ニ出（いで）ハ此通りも同るを通ふ
○大方ハ次第ニ定（さだ）よハ三人くの男の酒の言ハよふて四通り出る次第
定（さだ）よふ○乱酒（らんしゅ）よりてハ通り始（はじ）ふ
よハ常の次第よりもそくめるなりて四通り出る

一

盃の量よりうる盃のゑ夫人の注盃をくぶ
一ツ〳〵ごとくて呑（のみ）しまひ
そを迎ハうきよ今迄寺のゑ酒ハ又呑うる盃とそ

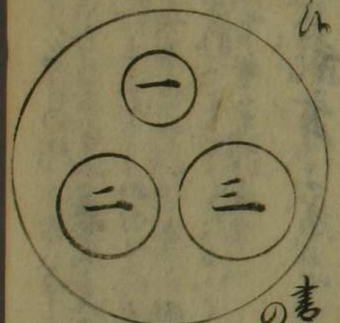
一

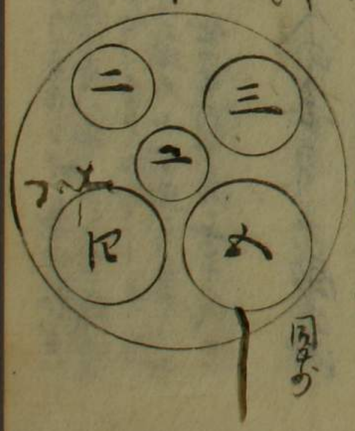
盃よ干盃も下よ盃のと酒ハ人ハ
（ごもたく）上よ盃べきやハつる但夫人の御前ゑて事ゑの人を
下よゑきても指ようて能ハ公方様ゑもさいくたべつる
ゑ時ハ盃の上よ盃と盃ハ
○盃のゑよハ盃を剛腹（スハマガタ）形（なり）ゑて事ゑ岩石亮ゑるゑの心ゑ
して盃と盃するゑハ盃ニハもゑ盃ニハつゑよハ事ゑの作者仕事不綺
○今仙ゑる者ニ仕（つか）ふ
頁末のゑべるなり

一

ニちほ〳〵ゑりの呑（のみ）ゑ
ゑべ祢（ネラ）ハいずれ

前





末

書ゑの如くのしべし

故ゑ乃ハ

○三年五年の喪あり。各〻の作り物を尽くしもてゆくありもてなすや。奉公に従ひ悟死を三切〻〻みりの盃の仕方。こと〻〻〻

なべて人のもの也、
○壻とのこれいふ時の壻とのひと
者とハのけてハ者とのみ也、
たの己ざと云ふこと是れ
と云ハ当家一所にてのこと
○是とてもなべて吾ハ
是とハ今も安永も一ツ人と事ハ
とハ右のごとく也人と事ハ

又壻とさす人己ざと云ふ
名称として可呑故実ども多し
親兄の壻ハ
○ひざと云てハ古ハ尤の己ざ
礼とをる、
そとこのもと云ハ故実とハ
ハ又かつて此ほよりて
う
人の中そのそ人を人と
母兄姉伯父伯母ハ
人の者也そ私のうやまひ

○名称ハ
故実とも多ク
者なとをりて云ふ
ハ人上事ハ事ハ事よりて右に記す通り
名称の係ハの作者あるもと云ふて定か
ハ親兄の壻ハ
ク〳〵ぞ但此壻ハ
ク〳〵と云ると礼としるや
○名称ハ
ク〳〵ハ人の者也
人を人と
ハ人と事ハ
人の者也私のうやまひ

○人と人〳〵に対して云ふ
○者とものけぞして
ハ者とハ
○人と人〳〵に対して
ハ人と事ハ

又壻とさす人己ざと云ふ
名称として可呑故実ども多し
親兄の壻ハ
○ひざと云てハ古ハ尤の己ざ
礼とをる、
そとこのもと云ハ故実とハ
ハ又かつて此ほよりて
う
人の中そのそ人を人と
母兄姉伯父伯母ハ
人の者也そ私のうやまひ

○名称ハ
故実とも多ク
者なとをりて云ふ
ハ人上事ハ事ハ事よりて右に記す通り
名称の係ハの作者あるもと云ふて定か
ハ親兄の壻ハ
ク〳〵ぞ但此壻ハ
ク〳〵と云ると礼としるや
○名称ハ
ク〳〵ハ人の者也
人を人と
ハ人と事ハ
人の者也私のうやまひ

○人と人〳〵に対して云ふ
○者とものけぞして
ハ者とハ
○人と人〳〵に対して
ハ人と事ハ

なべて人のもの也、
○壻とのこれいふ時の壻とのひと
者とハのけてハ者とのみ也、
たの己ざと云ふこと是れ
と云ハ当家一所にてのこと
○是とてもなべて吾ハ
是とハ今も安永も一ツ人と事ハ
とハ右のごとく也人と事ハ

又壻とさす人己ざと云ふ
名称として可呑故実ども多し
親兄の壻ハ
○ひざと云てハ古ハ尤の己ざ
礼とをる、
そとこのもと云ハ故実とハ
ハ又かつて此ほよりて
う
人の中そのそ人を人と
母兄姉伯父伯母ハ
人の者也そ私のうやまひ

○名称ハ
故実とも多ク
者なとをりて云ふ
ハ人上事ハ事ハ事よりて右に記す通り
名称の係ハの作者あるもと云ふて定か
ハ親兄の壻ハ
ク〳〵ぞ但此壻ハ
ク〳〵と云ると礼としるや
○名称ハ
ク〳〵ハ人の者也
人を人と
ハ人と事ハ
人の者也私のうやまひ

○人と人〳〵に対して云ふ
○者とものけぞして
ハ者とハ
○人と人〳〵に対して
ハ人と事ハ

一我のごとく壻とこ夫人云ふ
ごとく能をてくいできぬ
其能とハ一ツ不有ごと何ハ
○さてとうすてこれ壻の
など我壻とをとる時ハ我の
壻をとる時ハ
夫人〳〵を上ぬるなり
又夫人ともとも也ハ
だきて壻とハ敬ふ
同よう
○板書ハ夫人ごとを
汐の者ハとくるハ
あひて一座と云ハ
発と云ふ

一我のごとく壻とこ夫人云ふ
ごとく能をてくいできぬ
其能とハ一ツ不有ごと何ハ
○さてとうすてこれ壻の
など我壻とをとる時ハ我の
壻をとる時ハ
夫人〳〵を上ぬるなり
又夫人ともとも也ハ
だきて壻とハ敬ふ
同よう
○板書ハ夫人ごとを
汐の者ハとくるハ
あひて一座と云ハ
発と云ふ

もとの如く礼服を着し右のごとくのきつけにて礼酒よろしく八上下を後の方向きに着向敷居と平行に八の字の型に人〻を上手より下手へ順次に人〻と挨拶をなすべし

一 夫人〻打ち並びのあいさつ

人〻ようて御祝ひ申すべし又若き人などゝ雖も分けへだてなく打ち解けて話すべし何ごとも大なるあいさつ又夫人〻集りそんやうに着とゝさゝやうる右のよふたのもとそと挨拶して我想の男とちとちづもるれの乙ゆえ集すべし

○打のり方よろしく○立ち並びのあいさつ大なるくらけよ者どもりて出ても陸大なる御よ同一○人ようてよい若き人の功者の人をとゝ云○右のよふたのもとそとゝ雖きあいさつ

又打ち並びのあいさつ

夫人〻集りて御祝ひ申すべし又若き人などゝ雖も分けへだてなく打ち解けて話すべし何ごとも大なるあいさつ又夫人〻集りそんやうに着とゝさゝやうる右のよふたのもとそと挨拶して我想の男とちとちづもるれの乙ゆえ集すべし

○打のり方よろしく○立ち並びのあいさつ大なるくらけよ者どもりて出ても陸大なる御よ同一○人ようてよい若き人の功者の人をとゝ云○右のよふたのもとそとゝ雖きあいさつ

又打ち並びのあいさつ

○扱書ゟ立打ち並びのあいさつ（立ち上がりても上座ゟ下座へ向きて挨拶をなすべし）

○打のり方よろしく○立ち並びのあいさつ大なるくらけよ者どもりて出ても陸大なる御よ同一○人ようてよい若き人の功者の人をとゝ云○右のよふたのもとそとゝ雖きあいさつ

又打ち並びのあいさつ

○扱書ゟ立打ち並びのあいさつ（立ち上がりても上座ゟ下座へ向きて挨拶をなすべし）

一 夫人〻の打ち並びのあいさつ

夫人〻の打ち並びのあいさつとは左のごとく上ゟ右のごとくに着座なすべし

ぞつまこて左右の人の注ぐ酒を飲べくいそぎまれ
みも限を定べきや今但寺ハの法ひ
○左のごとく左右のごとく一本ゆハ右のごとく
かよきよとゆり雛や左右の字書違こと云ふ雛形なり左のごとく
ゆりそと用ひたのよハ今のめとおよそ右ハ者をおくれるめそれ
右のごとくつまこて今のめ如
出して注べきめ

一

大勢ひとて座敷盃三つ逃よ二えてぐ出るの略儀より急
但常み有のこと也ハ雑ぜこと也ハ
酒のけハせこと也ハ盃ハ人ハ
出ひるの常のめ

○いそぐごとくハ客人帰りとてそぐや ○頁文三ゆ式ハ大勢人客の時も盃
一つそりしちや雨妻ハのーこととするとすゆよ盃一つ大勢へめでくすゆ
人ぐ酒とのむめ雨をゆて名よ辞ぐ注ぐ辞ざれがおのつくきの
ミゆうれ雨妻のめこと也ぐ号名よ辞へ妻苦ひぐ妻こと

一

十度ぜこと也ハ雛ハ十人雨となして盃と十甲ゆ重て先一人盃と
逃よとして始めさ座ゆ初次の人ゆさして人よ逃よと干後
初又次の人のこて前のごとくすべし雨ゆ酌ぐ盃と注ぐかく
逃よを人よ後ぜこと初ともいそず貴とも今ず口とものごハぞ
若左板の事ゆりハこがおそらくも盃ハ人の差
用ゆよりて三ど入向きと差ゆそのまぜらくも盃ハ人の差
こがおそーの盃ハあいのおゆどハ又及ハいぜん
酒の入ハ花里と分ハつる
○まとゐハ多座や九ぐ先ぜる ○こがおそーこハこがと高ぜく ○白き盃ぐハ
白ゆきの七差こ式三献三ゆ盃の時用るくふけ出ゆ常のくふけとハ古ハ赤くふけと云 ○差ゆよりて差ゆよりて
三ど入とハ十盃を限ぐのしゆ三ど入ゆてハ大ゆてのそぐこと差ゆよりて差ゆよりて
三ど入とぜなり差ゆハ差ゆよりハ盃ハ用るくふけも盃ハ
三ぞつ酒と入る左三ど入とぜなり大ちりより出ぜ三差や ○あいのおよ云差ハ

一

○さて入りかゝりそく盃ごうへいろ〳〵の間の物とるまで○おど入ハ大ぢうぢう三旦り大ぶりにけや
さゞえうりやさずん

○こゝのこんとハこゝくハ早くやく十盃のこゝろと勝とする也
これと言のことく答るなどを勝とする也
夜示敏ハ朋友がうひすとをおのの名よ
ゑ〳〵元のさびくよそうちつゝうくひぞとのこゝろのまくらんとゐうくらぞ
ハ愛不煙や酒の香れ引つけて十盃のひろ間を書
船右の古歌の初とおして言のことく答ふる也〳〵

一

一ふくよハ酒とすきとをすてゝよ一ふくおちつくとハ
二ふくとも云てハ曲なくハ又ふくのあいぬも云曲ハ
○一ふくと云ハ一ふくのこや○さてやうとハ奥もなきや

又一文字よりハ先も去てゝ一文字と引ハよさ〳〵ゑ〳〵で
なく〳〵ずん又去〳〵ハ〳〵○バ一文字なひうとハいずんハ二つの香ハ大事

のうちやくハ〳〵
○さてゝ一文字と引ハ童のさてゝ別の新衣之笠よ一文字と引也
さてゝ元なりとさてゝ元なひうとぬく○ハ二つ
の香れくハ一ふくと一文字の二つ也○大事よハ右の二つとも能程よりがさ
きも去そんぢとハこゝろの酒とのこゝろ也

一

ひうとよさハ盃の中よ山桃と入てのそそて面よこそるゝ
〳〵〳〵ふうの事也
○のそそて面よハ盃の酒口へ皆入と一物なきのこゝろ酒と
のこゝろみて後よのこゝろハ奥なき也○ふうの奥よ十盃のこゝろ
大酒の時山神引素襖引刀引常のごく小袖も素襖と
當座よたゞひよめーくゝらゝハ言うふる法を
〳〵〳〵沢大男ハ分行ふ酒
○大酒の時よハ酒のうの時ハ
二つのと申うん時小袖も素襖も刀も
ふこゝろよハふ盃の引ハ初めハあ
るカめぎて去そゝ山神も素襖も刀も
○山神引素襖引刀引きよハ盃とさて
も素襖も刀も
ハ引ハ初
ぬぎて
言うて

ねりる〻事後ハ上ハうをもいつう又人より延金の所迄孔
よ少細そも又事後ても刀ハうとも活ハるやうのて古人よりもよ活ハるうと云ハるや
刀とをもけハ脇へ引ひ脇へ引ひりむきそぬきてをそや人より更ハるへきてそれとも
脇へしき我さしうるとめぎそれそハきを出て今活ハうるとさ〻ハ〻れとハ〻
多ともそてとハ真之活上中小之の刀ハ〻右よ刀と云ハ〻すきの刀ハ〻
〻又さうすきうる云長〻ハ刀寸沖ハて柄すのぞ之句めぬきて沸ハる句小刀
ハうぐいとすす長き下緒と付ハ〻小脇ハ〻ハ〻ハ〻

一 打刀と人よびかうくいもの

いさうのごく打刀計也

○人よびよふ川出あよそや ○一献の時の通肴也 ○常のごとく公方様へ進上同前

○膳妻の時のごとく常の名ごしらへする時礼儀よき上の時のごとくあるべし

一 大酒（つぼさき）の時肴ごとに箸をかき等唐あ馬牛

とも一又添りんる常のごとく時のやうにするべし時宜

きざみ海鼠（こ）のごとく

○大酒の時ごとく酒妻の時 ○具足ハ指置也 ○打ち具足ハ通具也皆

むしやき等よりものがけ等 ○唐あハ筆壺香炉香合などの形や唐より

ほりうるあり ○出し又添りんるごとく酒宴

也 ○汁直定るべくごとくあれども先初ハきりやき汁を定る

又大門屋立後度ごとく酒の間ごとく

ごとくの ○長具足とハ長き刀野太刀小柄ぬきの類出ぬやう

何ぞも七光様の由返るやうにつるさうなどの工夫便宜

よろしく而よそくく丁寧亜ごとく誠よく及ぶべし

○大門屋ハ大門左右を走衆ハ永正二年九月長具足の出れと義典より

伊勢守貞陸（孝景）より迎ハ今仙斎の ○立後ハ立後ハ立後屋敷

亜ごとく大門同様ごとく ○長刀小柄ぬきの類ハ先年山名左衛門督宗全

宗張より酒ぬき長具足ハ光進の出れの ○迎又貞親ハ ○大門屋ハ大門左右を走衆ハ永正二年九月長具足の出れと義典より

七光様ごとく宗全の侍より役ずの ○立後ハ立後屋敷

伊勢守貞陸（孝景）より迎ハ今仙斎の ○立後ハ立後屋敷

亜ごとく大門同様ごとく ○長刀小柄ぬきの類ハ先年山名左衛門督宗全

宗張より酒ぬき長具足ハ光進の出れの ○迎又貞親ハ

七光様ごとく宗全の侍より役ずの

やうにして ○打ち具足ハ通具也皆

むしやき等よりものがけ等 ○唐あハ筆壺香炉香合などの形や唐より

ほりうるあり ○出し又添りんるごとく酒宴

也 ○汁直定るべくごとくあれども先初ハきりやき汁を定る

又大門屋立後度ごとく酒の間ごとく

ごとくの ○長具足とハ長き刀野太刀小柄ぬきの類出ぬやう

何ぞも七光様の由返るやうにつるさうなどの工夫便宜

よろしく而よそくく丁寧亜ごとく誠よく及ぶべし

○大門屋ハ大門左右を走衆ハ永正二年九月長具足の出れと義典より

伊勢守貞陸（孝景）より迎ハ今仙斎の ○立後ハ立後屋敷

亜ごとく大門同様ごとく ○長刀小柄ぬきの類ハ先年山名左衛門督宗全

宗張より酒ぬき長具足ハ光進の出れの ○迎又貞親ハ

七光様ごとく宗全の侍より役ずの

やうにして ○打ち具足ハ通具也皆

むしやき等よりものがけ等 ○唐あハ筆壺香炉香合などの形や唐より

ほりうるあり ○出し又添りんるごとく酒宴

也 ○汁直定るべくごとくあれども先初ハきりやき汁を定る

又大門屋立後度ごとく酒の間ごとく

ごとくの ○長具足とハ長き刀野太刀小柄ぬきの類出ぬやう

何ぞも七光様の由返るやうにつるさうなどの工夫便宜

よろしく而よそくく丁寧亜ごとく誠よく及ぶべし

○大門屋ハ大門左右を走衆ハ永正二年九月長具足の出れと義典より

伊勢守貞陸（孝景）より迎ハ今仙斎の ○立後ハ立後屋敷

亜ごとく大門同様ごとく ○長刀小柄ぬきの類ハ先年山名左衛門督宗全

宗張より酒ぬき長具足ハ光進の出れの ○迎又貞親ハ

七光様ごとく宗全の侍より役ずの

やうにして

一同叶ふ猿楽田楽ともの遊女小杉紙をしめす亭をうたひ
ものゝ出ていとゞ興ある客人ゟ出すもの也
そのきうしのやうすやいかに
○同叶ふ酒宴の叶ふ○猿楽田楽ともに云
○小杉紙ふ古ふ頻に用ゐる物ゆへ如此
○杉紙ふ川谷の紙ぇんしうなどゝ云
杉りやうと又世ふ云ふよりて紙の名ぞ
てきるゆへ今の世のごとく今ふ何ぞなどゝ書
ふ古ふ今日ぐるまの如くにて令ふ
なぐるまいふ○そこで
やうふ猿楽田楽狂女ふ亭ふ
者ゟ客人ゟうしろへ
公方様ゟて御杉紙を下ふ時必ふ
ゟ下ふ
○杉紙ふ
後又ふ
ぬきのごとくにして
出て猿楽ふ
又私ゟて要脚とゝのへて出ふ
百疋ゟどのゟ也千疋ともふ
ゟも杉紙ふ書てきふゟも勿論
（千疋ゟゟ杉紙二つゟきふゟも
三百疋ゟどゟりて令仰寺ゟゟ

ふ亭ふのきうしやうふ
ふ客人（斜ての礼ふ紙ゟ
公方様ゟて御杉紙を下ふ時ふ
ゟ下ふて懐中ふ
○下ふて
後又ふ
ぬきのごとくにして
出て猿楽ふ
又私ゟて要脚とゝのへて出ふ
百疋ゟどのゟ也千疋ともふ
ゟも杉紙ふ書てきふゟも勿論
（千疋ゟゟ杉紙二つゟきふゟも
三百疋ゟどゟりて令仰寺ゟゟ

○要卿ハ多田氏○地名ハ未詳ナレドモ一方ノ旧名ナルベシ○没人ハ積荷ノ没者ノ如キ
際地ノ名ニヤ○ウケテハ負取ノ意カ

又語ニ名ヘ作成ノ時ハ一方ノ定文ヲ以テ御年貢ノ内ヨリ引ケルモノニヤ

元ヨリ当国モ狭キ故ニ随ラノ仁十人ヲ以テ定メ又村絵ヲモ作ラシムルモノカ

○寿ハ西洲ノ御年貢ノ方服ヨリ取ル事ニヤ○要卿様ハ当国ノ守護ニヤ○名ヘ作成ノ時ハ一方ノ定文ヲ以テ御年貢ノ内ヨリ引ケルモノニヤ

○寿ハ西洲ノ御年貢ノ方服ヨリ取ル事ニヤ○要卿様ハ当国ノ守護ニヤ○名ヘ作成ノ時ハ一方ノ定文ヲ以テ御年貢ノ内ヨリ引ケルモノニヤ

元ヨリ当国モ狭キ故ニ随ラノ仁十人ヲ以テ定メ又村絵ヲモ作ラシムルモノカ

○寿ハ西洲ノ御年貢ノ方服ヨリ取ル事ニヤ○要卿様ハ当国ノ守護ニヤ○名ヘ作成ノ時ハ一方ノ定文ヲ以テ御年貢ノ内ヨリ引ケルモノニヤ

元ヨリ当国モ狭キ故ニ随ラノ仁十人ヲ以テ定メ又村絵ヲモ作ラシムルモノカ

今度ノ訴ハ一方ノ公方御局武部ノ輔ヲ以テ作成ノ時ノ定文ノ通ニ元ノ如クニ御年貢ヲ納メ来ルノ人ヲ同苗ノ元ト称シテ年貢ノ内ヨリ引ケルヲ以テ訴ヘ出ルニヨリ

いへ又宮月松ぞやしの附ハ高らいは万疋當日は万疋又不
いへ御免除よりハ御扶持十人ぶち有よしなり
きとしくる附ハ万疋ぶち不ハしや
○三げき能く有くの能こ○宮月松ぞやしの事ニ而ハ○高らいはし出来の
料也尚てお能の入用のあるよし○御扶持ハ十人ぶち有よし

一 芝明院殿の御代御扶持ハ寛正五年男乳河原少て勅進猿楽させら
れ下有て二百人扶持ハ御代の将軍義政公より東山殿と云ハ是や○
下有て二百人扶持ハ御代の将軍義政公より東山殿と云ハ是や○芝明院殿ハ尊氏公より八代の将軍義政公迄御代々御扶持ハたゞ
芝明院殿ハ尊氏公より八代の将軍義政公迄御代々御扶持ハたゞ
きすべき為と御扶持ハ○男乳河原ハ○猿楽の名ニ
きすべき為と御扶持ハ○男乳河原ハ○猿楽の名ニ
とも云ふ○兎も芝ハ猿楽の名ニ

一 芝明院殿御代寛正五年男乳河原少て勅進猿楽させら
れ下有て二百人扶持ハ御代の将軍義政公より東山殿と云ハ是や
芝明院殿ハ尊氏公より八代の将軍義政公迄御代々御扶持ハたゞ
きすべき為と御扶持ハ
とも云ふ

御扶持の事別紙に注せ

○寛正ハ人王百三代後花園院の御代の年号也○なでふの事ハ承と云ふ賀
茂の辺をこゝ○勅を猿楽ハ寺建立修復等の助力のある猿楽をすゝ
○勅を猿楽ハ御扶持別紙に注せ
○寛正ハ人王百三代後花園院の御代の年号也○なでふの事ハ承と云ふ賀
茂の辺をこゝ○勅を猿楽ハ寺建立修復等の助力のある猿楽をすゝ
○勅を猿楽ハ御扶持別紙に注せ
勧進ハ寺社等の修復又ハ架橋等の為に勧化をなすこと○勅進ハ
勧進ハ寺社等の修復又ハ架橋等の為に勧化をなすこと○勅進ハ
勅許を以て勧進をなすこと○別当ハ注せよ○御扶持ハ
勅許を以て勧進をなすこと○別当ハ注せよ○御扶持ハ
ある八服次御扶持ハ寺領ハ寺社の事ニ而ハ
ある八服次御扶持ハ寺領ハ寺社の事ニ而ハ
一人ハ一ヶ年ニ米何程と云ふ定ハ
一人ハ一ヶ年ニ米何程と云ふ定ハ
○一ヶ年ニ米何程と云ふ定ハ

初日五日御扶持の一献細川右京兆 千阿弥流 将元羽院 還御ありて亭ニ入
波亭へ御成被遊ける御扶持元御扶持ニ而ハ無之候へ共
万疋ニ当る御扶持ハ御成被遊ける御扶持ニ而ハ無之候へ共
ぬぐ御扶持ハ御成被遊ける御扶持ニ而ハ無之候へ共
○初日五日ハ御扶持ハ御成被遊ける御扶持ニ而ハ無之候へ共
勤ル故御扶持ハ御成被遊ける御扶持ニ而ハ無之候へ共
○初日五日ハ御扶持ハ御成被遊ける御扶持ニ而ハ無之候へ共
勤ル故御扶持ハ御成被遊ける御扶持ニ而ハ無之候へ共
勤を能三ヶ日ハ御扶持ハ御成被遊ける御扶持ニ而ハ無之候へ共
勤を能三ヶ日ハ御扶持ハ御成被遊ける御扶持ニ而ハ無之候へ共

五日の伊勢家の四一献をハ細川右京大夫
の居宅○千時管領ハ右京大夫
ハ右京大夫の名字をハ勝元といふ
よし書よ後見るをよし事よめく細川
より六角ハ○織田弾正よし
云々ハ六角ハ○少納言
伊服のけてよし云方ハ
まゐ四元のぬきする少納の
八十二ぐうと安倍くるやうに
くひするう

二日の申一日とうも七日伊勢家の一献ハ
時細川屋亭とうして多人数
一万疋をひ伊服守ハ
○二日申一日とうも七日よし
七日ま又能ある○政長ハ
多人よし伊服とう入る
還御の四辺をまゐて還御
て伊服とう入る○能あり

三日の申二日ときて十日伊勢家
ハ治部少輔屋亭
御還如何ハ伊服守ハ
のくう笑へくする人もあり

○三日のハ勧を能や中二日
又能ある○治部少輔ハ新波治部大輔
寛正五年勧を能よう
る心又まるよ應仁の大乱
ハ能四兵ハ
う安へとハ御ハ又ハ相ハ元の
元の者てうしとさげて祝言
兵ひて舞者の中行へ
いうしの後ゆハ四方ハ

やうよりて左史などゝ申名人（めうじん）のもれ聞（きこ）ゆるやうに付（つき）ては
此頃（このごろ）元（もと）の公家（くげ）元（もと）の侍（さむらひ）元（もと）の猿楽（さるがく）などすべて順（じゅん）の舞（まひ）などさ
せらるゝ由（よし）申（もう）すものもいたる又（また）うたひ入（いり）うたひ（うたひ）ばうたひ入（いり）うたひ
てふうたひ入（いり）の外（ほか）は笑（わら）の大（おほ）ごと小（ちひ）さき打（うち）ち笛（ふえ）も
附（つけ）くそと吹（ふ）かしなどゝ敷（しき）入（いり）をなどゝ聞（きこ）えけるとひかうて打（うち）ち
一せい舞（まひ）などゝ申（もう）すはいかゞ（いかが）なくいつる

○亜相（あしやう）（秀吉）公（こう）の御前（ごぜん）にて猿楽（さるがく）の勝負（しやうぶ）を御覧（ごらん）ぜられ候（そうら）ふ時（とき）○順（じゅん）の舞（まひ）ハ順（じゅん）くに舞（まひ）入（いり）うたひ入（いり）ハ入（いり）きりに舞（まひ）入（いり）くと云（いふ）○一せい舞（まひ）などゝ申（もう）すハ入（いり）をなどゝ聞（きこ）えけるとひかうて打（うち）ち敷（しき）入（いり）をなどゝて舞（まひ）入（いり）ハ入（いり）きりに舞（まひ）入（いり）くと云（いふ）○一せいとハ一番（いちばん）の謡（うたひ）の中（なか）より次第（しだい）通（とほ）り一せい舞（まひ）などゝて舞（まひ）入（いり）ハ入（いり）きりに舞（まひ）入（いり）くと云（いふ）

一座中（ざちう）にて能（のう）とさせられ候（そうら）ふ時（とき）必（かならず）通（とほ）り猿楽（さるがく）四人（よにん）囃子（はやし）二三人
ほかの通（とほ）りよりハ多（おほ）くの人（ひと）数（かず）にて候（そうら）ふ

頭書
義経記（ぎけいき）に静（しづか）吉野（よしの）より捕（とら）へ来（きた）りて鎌倉（かまくら）にて舞（まひ）を舞（まは）せらるゝ中（なか）にも通（とほ）りの如（ごと）くの舞（まひ）ありさるがくいせの如（ごと）くの舞（まひ）ありて今（いま）ハ舞（まひ）ハ入（いり）をなどゝ申（もう）すなり

能（のう）とはあらひ心（こゝろ）得（え）の時（とき）ハ番一（ばんいち）番（ばん）○通（とほ）り猿楽（さるがく）とハ通（とほ）りの四（よつ）の猿楽（さるがく）一番（いちばん）ずつ演（えん）ずる事（こと）○一番（いちばん）ものゝ演（えん）ずる内（うち）の真（しん）の人（ひと）数（かず）ハ二人（ふたり）ツレ三人（さんにん）ワキ一人（いちにん）アヒ一人（いちにん）囃子（はやし）四人（よにん）地謡（じうたひ）八人（はちにん）後見（こうけん）二人（ふたり）ほどあるもの也（なり）○通（とほ）りの猿楽（さるがく）とハ順（じゅん）の舞（まひ）入（いり）うたひ入（いり）ばうたひ入（いり）笑（わら）の大（おほ）ごと小（ちひ）さき打（うち）ち笛（ふえ）も附（つけ）くそと吹（ふ）かしなどゝ敷（しき）入（いり）をなどゝ聞（きこ）えけるとひかうて打（うち）ち一せい舞（まひ）などゝ申（もう）すハ入（いり）をなどゝて舞（まひ）入（いり）ハ入（いり）きりに舞（まひ）入（いり）くと云（いふ）○一せいとハ一番（いちばん）の謡（うたひ）の中（なか）より次第（しだい）通（とほ）り一せい舞（まひ）などゝて舞（まひ）入（いり）ハ入（いり）きりに舞（まひ）入（いり）くと云（いふ）○一座（ざ）とハ一番（いちばん）の猿楽（さるがく）四人（よにん）囃子（はやし）二三人（さんにん）通（とほ）りよりハ多（おほ）くの人数（にんず）にて候（そうら）ふ時（とき）必（かならず）通（とほ）り猿楽（さるがく）四人（よにん）囃子（はやし）二三人（さんにん）通（とほ）りよりハ多（おほ）くの人数（にんず）にて候（そうら）ふ時（とき）○田楽（でんがく）のもの共（ども）よく記（しる）す筈（はず）也（なり）○田楽（でんがく）の能（のう）の内（うち）の猿楽（さるがく）の事（こと）○田楽（でんがく）の能（のう）の内（うち）の猿楽（さるがく）の事（こと）

又能（また）今（いま）一番（いちばん）などゝハ公方（くぼう）元（もと）の公家（くげ）元（もと）の侍（さむらひ）元（もと）の猿楽（さるがく）などゝ申（もう）すハ
元（もと）なども申（もう）す事（こと）もいつるなり
此頃（このごろ）元（もと）の公家（くげ）元（もと）の侍（さむらひ）元（もと）の猿楽（さるがく）などゝ申（もう）すハ
此頃（このごろ）ハ信長（のぶなが）秀吉（ひでよし）公（こう）の事（こと）もいつるなり又（また）公家（くげ）元（もと）の事（こと）
いふべし

○紙今一書よハ後と不知ゆゑ也と云也○也俗よりハ（おりてよハ下國次第ゆゑ也と云ふ）
（おりて今一書よりハ少し後くハ下國次第ゆゑ也と云ふ）
也依元ぞもやさしい為昭院殿御病中の事ゆゑ也と云ふ此ハ事ゆゑ也と云ふ
今一書と不知ゆゑ也

一 同附少納ぬぎのもの也服を夫（ハ必ち夫）にてさきに素襖乃上よりかけて今れたのきりとよりつゝ袴ぬぎいて元の肩よりかけいて也さかもりそれまでハ又着ハなしまでハもちろんかけ（ハ公家衆ハ公家元大名也依元ト沢ちかハ）通りかゝる。祝の元げんて少納ぬぎいて座ハ（ハ同ろん）招て出いて座ハと元の者元ハ猶事あるゆゑ○同附ちかい海帯の時ハ○少納ぬぎハ少納ぬぎいて元の者ハ○也服ハ公家衆の也服とちがひや○おりかけ当てとハ○今れたハ座の名ゆゑ應邪大事の也附品同よりハ今れたと云ハ文と云ハ二人の御女と云ハ下ゆゑ

也服ぬぎの附ちかひとハ○こゝ中ちかひとハ○ハ下ちかひとハ祝儀ゆゑ○同ろんハ退くる也と云ふ
又私ハ面ゆゑも事ゆゑのぬぎハ（ハ名ぬぎハ客人よりハぬぎぬよ）
ハ退附退よるべし一家よ二ちぬぎ（ハ名ぬぎハ客人よりハぬぎぬよ）
ち夫一人ハ名ぬぎハ客人よりハぬぎぬよ）常のもの也てハ
をさんハ今れたきの者ハ又元の者ハ也ざゝてもぬぎて
也ぬぎハ海ぎきよ（ハ名ぬぎハ客人よりハぬぎぬよ）ハ我ハぬぎハ名ハ
○元の者ハち夫の分の者と○今れた者ハ元ゝ
祝ひとし加少納ぬぎきげんとハ祝ひとし

素襖ぬぎのもの元ハ座中也ハ（ハ名ぬぎハ客人よりハぬぎぬよ）
如ハ祝ひ事ハ（ハ名ぬぎハ客人よりハぬぎぬよ）招て出て座ハ（ハ名ぬぎハ客人よりハぬぎぬよ）ハ元の者ハ
まゐりハ（ハ名ぬぎハ客人よりハぬぎぬよ）ハ元ゝ也のもハ（ハ名ぬぎハ客人よりハぬぎぬよ）ハ百ゝ（ハ名ぬぎハ客人よりハぬぎぬよ）ハ要脚（カヽリ）よ
上下（カミシモ）とゝ（ハ名ぬぎハ客人よりハぬぎぬよ）ハ私ハ元ハ（ハ名ぬぎハ客人よりハぬぎぬよ）ハ同ろんあゝ待かまへなど

とめぎてるげん事一ひる酒ぐん

○ねぎごと迫ハ公方様の仏事をとりおこなひ給ふ時にあづかりてねぎ給ふをいふ（右のごとくにとりおこなひ給ふ時にあづかりて祈り給ふ事をもねぎごとといふ也）

○ねぎて後別の座あるゆゑ神酒をいただくをいふ

○ねぎごとをいふ事也

一 祝のあるじ方へ行てもてなさるゝ事

○ちあひせんとよび祝言をいふ

一 大風の時漁ひにいでて猟業もせず

○ぶつかりて音沢とうるさし

○ごうとふく音沢とうるさし

○ねぎごとをいふ事也

○ねぎごとをいふ事也

○ねぎごとをいふ事也

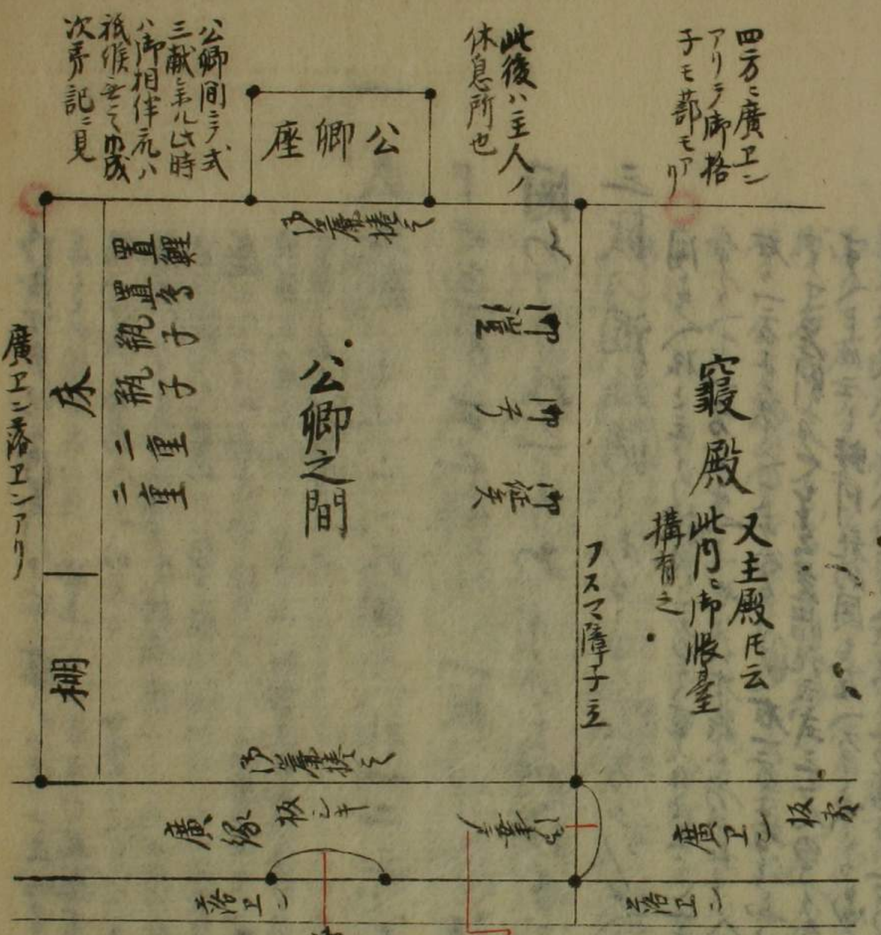
ハ一中ぐらい 好き奉公仕い者ハ世ハこと
事のすきと 今仙寺ハ酒のおりくすき
○大和ハ一ハ茶よりこうる大和猿楽の子や ○きうめうのうちよハ切虎(たが)
の内こ芝居の絵の切の垣とすきうめうの内とてこふハ芝
居絵の者の如くとてこふ 此女ハ者の内よりハ職人を欲合の絵より早歌うたふ者ハ
小素袴着て扇と絵うきうの文句や ○のぐ子よハ加賀女とて狂女の
ハ加賀女よりハ狂女ハ加賀ハ ○田楽子ハ田楽法師の欲の子
ぐらめてさいーかず 参会のうち ○ちうまんーよハ酒のうの御うの
よハ世の中の人ハこと向り ○せいこもん
一 殿中一献の時ハ多人ぬて ハこと二三度ハ ハつる猿引
酌ぬて 公家元ハ相伴元ハ
○殿中一献の時ハ公家ハ酒多のハ ○ハ人ぬて ハ通りよハ 御末の ハ家へ
ハ酌出て 吉と ハ家へ めーぬさ て ハ酒 ハ家へ ハ通り

の事一番の ハ初ハ ハ通りの ハ公家元の ハ
ハハ ハ家のうちよ ハ家の ハ通りて ハ家へ
同よう庭上へ ハ家の ハ家へ ハ初ハ ハ家の ハ通りて ハ家へ
常の如く第二ハ ハ家へ ハ初よの上なる ハ家へ ハ家へ
方へ ハ家の ハ家へ ハ初よの上なる ハ家へ ハ家へ
ハ家へ ハ家へ ハ家へ ハ家へ

○本の人数よい初の客の出迎う出する人又二客めする出るや○出勤定元よい公方
様の出宅前よい三客う者と出る人今うけるまいまよえそう○三何の走元よい
三日出本の出迎よ祇候まする走元ハ出刀とできよひきよ云あを勝う
さ一出成の附出こしの共よ三て狼藉者をど三一（て成敗し又番出一郎の
附出を祇候と御もっ治やば元ハ出迎よ出るるもる客出るもる

三客めの出勤定元の門来の人数又出員とうけらる）いを
一面人（先ヅ）定 上様（カミサマ）の御定元（これも定）を引の来 又出員と通ら）同明
め一出それ事もひし一中次いあを出るもひし一必一客ハ
祇候又附よりう桃よ別よ出ら）いて猪楽よもよ附
来中ら御定本事中
○出勤定元の内よい三客めの出迎ての出勤定元の門中ての人ら）
来の人数よい三客めの出迎ての人ら）○引いハ役前のもの）接書ハ
右筆方よ云引のもの ○そもお定よい出迎うよ出るる
方よう本出るもの ○上様よい御定勤のもの ○引の来よい附
勤定の出勤定元ハ中ら）○御家来よ云ハ出迎うよ出る出一本ら）引同ると云ハ
出る ○御家来よ云ハ出迎うよ出るるもる本出るもの

一公方様諸家（御成の事 先亭ら門外よ祇候い居所大門
のねうよきて出畏よ向る（し又中一ようて門のねうるかよの引ても
出ら）一ご角うし
○諸家い話方名ら）○大門のねうのまてよい門の一方のねの通う一同中退
て出中よ向ひちるや但ちるあいだい三てかるやら出ら）一人一町
ま附い向うり出先（走うち亭ら方うり三
附るよ人と有亜や番頭い御成の次第元ら）三
家ら）よ伝てかつ、遠ちる御成の案内ハ御家来ら）
御成の次第元ら）三ら）ら）ら）



此後ハ主人ノ休息所也

公卿間ニテ式三献ヲハル時ハ御相伴衆ハ祇候セラル次ノ間ニ見ユ

四方ニ廣エンアリテ床格子モ都モアリ

寢殿 又主殿ト云 此門ニ御供ノ者構有之

フスマ障子立

公卿之間

置鏡 置鏡 親子二重 親子二重

床

廣エン 簀エンアリ

心得の為公卿の間の絵図を此て記す 主殿 公卿座おゝよそ三尺斗 三尺斗 寢殿 公卿之間 床 置鏡 親子二重 置鏡 親子二重 上ノ間ヨリ 上ノ間ヨリ 廣エン 簀エン 板敷 簀エン 廣エン 板敷 タテスナ 御妻戸ノ間ニアリ 四扇ノ内ニ三扇アリ 掛ル タテスナ 南

如此心得ラルヽ程ニテ役人一色ニテ持第ニテ進上スル家モアリ

又今ハ復略ヽ之ヲ作ノ如シ○紫革鞘ノ刀ハ下ル程ノ人ハ用ユ○御供ノ唐櫃ノ次ニ被ヲ入タル唐櫃ヲ舁ユ（伺候ノ人ノ着ル被ヲ入ル唐櫃ヤ○ゆかけ○ゆかけ）○三献ノ御肴ハ雁ノ汁ニ○式ノ御肴ハ鯉ノ汁ニ○御肴ニ付テハ左ノ如シ（雁ノ汁ニ）伺候ノ人ノ前ニ置ク○三献ノ御肴ハ雁ノ汁ニ○式ノ御肴ハ鯉ノ汁ニ○御肴ニ付テハ左ノ如シ

式ノ御成ノ時ハ亜ノ字ノ上ノ点ノ如ク

常ノ御成ノ時ハ亜ノ字ノ上ノ点ノ如ク

常ノ御成ノ時ハ亜ノ字ノ上ノ点ノ如ク

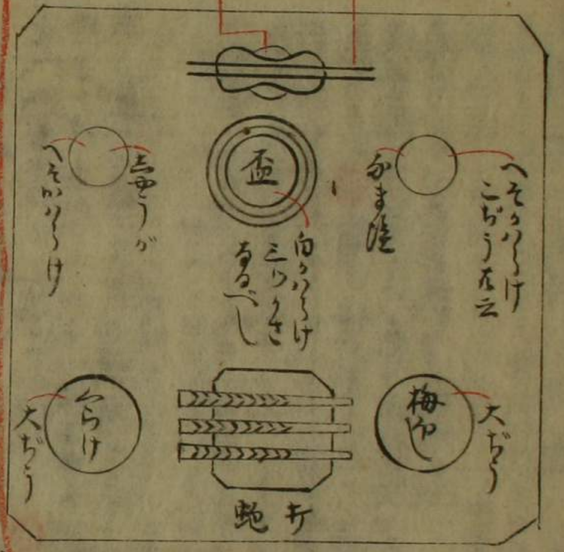
一式三献のうら〳〵（杯同上）一二三とありて一方よりの
ものも也。別に式三献のうらハ一献ごとに肴ありて事に
同あげられ三ツあげるゆゑ又式
三献の酒杯流〳〵あるべき歟

○同上〳〵杯と云ふ事ハ一二三と
ありて一方よりハ李賀ハ男の如く人の前よりハ一二三の肴を
右の一方よりハ左一方よりハ右一方よりと左右ふたゝび人よ
りて引別ものゆゑ左右ふたゝびと云ふ事ハ一二三ともに
すゝめ三ツ蛭門就の図も左（右）右（左）ありて又ハ第一第二第三
ハ年人（の）杯の又ハ第一第二第三ハ右の方（左）左（右）ありて又

奉公人ハ常ニ式三献ハ右（左）左（右）ありて又献ハ右（左）左（右）ありて又献ハ右（左）左（右）ありて
ものも右（左）左（右）ありて又ハ供の人ハ常ニ式三

一 御茶

御茶くりけのだい



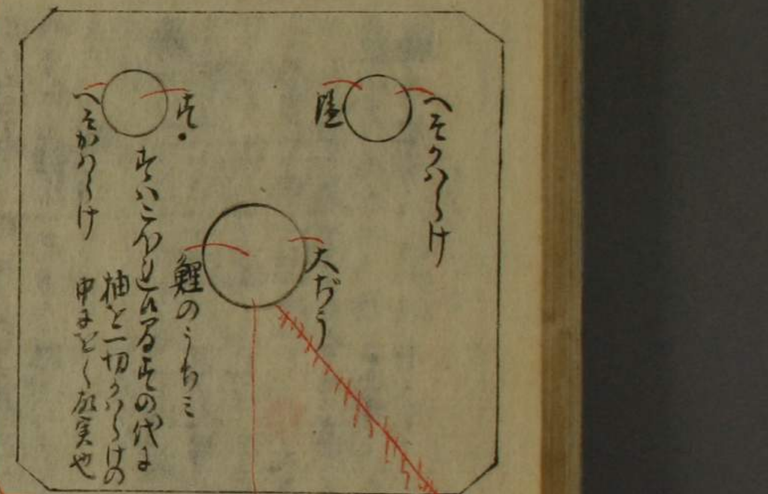
くりけの数は二月のあるけは十二ぴくりかくべし
かそき方とのけてさすさいぶくりづつの長さるべし
き手ばくりづつ残してけづりかくべしうちあそびのやう女房の茶
はくりるべし

梅ぴん数六つ又は七つ梅ぴんの大小ふるべし
おあそびおあり尾の方成
たへるべしけぼりかくべしお盃と云ふ
数三ぴ又は四ぴとてけづりけるは二おは暑き

みくりけはくりけの事方と上の方へおりけるめてさきくる二数ごぢうくりけのおあ○白くりけ茶と云○大ぢうい三ど入るう三遍り大ぢうかりけみど入の次也○尾のかたふかきき方と云○けぼりけの数十二月の数也○女房の茶はくりるべし○女房の茶はくりるべしと云ふ大事成お作法書ニも云ふまでもけぼりけるべし○女中よりもくりるべしいちくりあるべし○男の茶はくりるべしと云ふ女中よりもくりるべしいちくりあるべし○男の茶はくりるべしと云ふ大事成お作法書ニも云ふまでもけぼりけるべし○

二

御茶

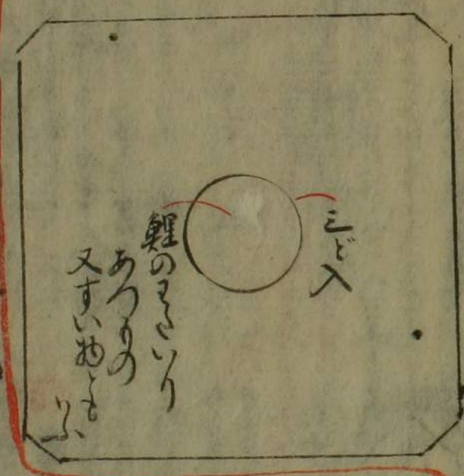


公得意かくべし鯉なるべし

○ぶつ切り一本ぶつんぶつるとあり同もとのごとくも云腹のさとゐつテスリとよし頃和名抄に見えり魚の水中にあるごとくそある時腹と他七ゆそぶつるともぶつちぶつるとも云や○うかりとうすくとうち通しとハぶつ七ぶつ位よろして通べし六ツ大云流もある事なりハ一魚全

三

御茶



又云ふこも鯉や鯉の色丁と切る事不冷ものに○ふいりい鯉のあつ物にあつめとも○ふいりいと云畢てかく記事歟

○頭と奏てもう上よ杉ざの引とと通べし祝の時尾と奏べしこのいういさきさの引とと通べしういさけいくとよい杉さの引とようの尻右の引とと云や上よりの尻右の引とと云や

ひ式三献の用心常式の事歟

○ふいりいあのよやそくくたよ切て奏るとも奏るや○杉さの引れとよい服の下者五の

鯉

右の外名不多

又赤具の事人よる〳〵し

一向くそる也

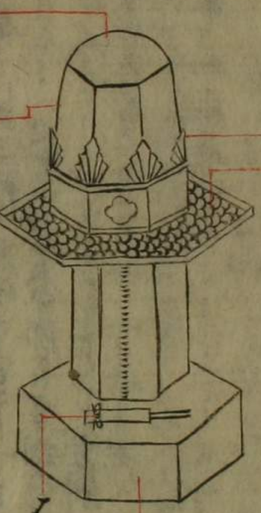
○赤具とゝ式三献の肴のくりとさして云也人よる〳〵しく大略家門流儀の式正の時は公方様御家門流大名なども此方を用ゐ大中仍芸家軍抱なども此方と用ゐる也人よりて此方三方足有の足打女ハ二方男の第舎ハ足打女ハ二方と別ゝくる〳〵ハ此書の事よりこそ〳〵又蜷川記一向くそる也とゝ引こそ〳〵のこと

一本ゝ又赤具のくりとさして云也人よる〳〵しく又赤てくそうくそある物を〳〵しと云一向ハ女中〳〵ハ一向くそる也とゝ引又赤てくそうくそある物を〳〵しと云一向ハ一向の魚の梅酢のくり条の文句仍入くる也是迄ハ一向の魚の梅酢のくり条の文句仍入くる也平井よりこそ〳〵しと云一向ハ一向の魚の梅酢のくり条の文句仍入くる也平井よりこそ〳〵しと云一向ハ一向の魚の梅酢のくり条の文句仍入くる也

一ほうびけの梅酢先うちそうして大くさりの梅酢也中ふてうばのこのあらきを入る也猶口伝あり

とかくどろゝ也白久ゝとむしと用赤色ハ口伝不可云ゝ色ハ

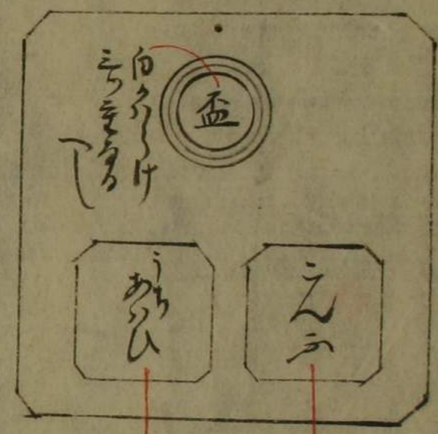
さあ笑ふ時はうつむくべし男女のわ
らへ様ちがふ事
○うちえとふくひうけの事の外うつ
うら板をおりそげて二角に似るや○中よてうなの
この向きをうるとふくひ鮑ハかろくして上よりあとをれいうちくりたる
中よきめへおりのるよりのそ事の中よてうたのこハむぎのはやこめかい米の
めのごとくそもおりてみの事と左へ向ふす



○経日身ありとふ十人と云ふ事ハ
多ハ物語記のもとより○そむいをとしもこそむのかしうとごん
ぎりと云ごんきりと割るや○きあハ戯也りしうとときあだうと云
須弥とふ須弥山とふ山也ひさ山天竺岡とありと云也を山のそ事也心とぞ須弥
山のもとようとこうる古歌あり○小ハ黄と南ハまく事西也をおよそめろ
の山とそこそあいろの山ハ鞍合落山と書て須弥山のすとぞ須弥山とかく
どうてよ無よおおのくりあとるとこ毛色千変の後なる○男
女のこらへうかるもの事へハ毫を振ぐくそぐみ
猥書なり杜行若由をとそ書甲三角なる合ハの袖と前の男ハ向ふ
ありうひおうも男女のくりめある○色千
年幸よ去てこぞりとりてけばりおのそうかしてまんぢうみ
なうよはじべし 入去てさようそあるねみべし
○年幸ハへいうとふくひうけや○去てこぞりとして
ふへいうのくひうけとふくひうけとふくひうけとふくひうけや○けづり
ぬのそうかしてふ右のやぐりあとをそ
りうるねの形よある也○かんちうのありよほひべしふ右のやぐりる
ひうけとよ無のごとくりうるやうのくひうけとふくひうけとふくひうけ
のまうよりうるやうふくひうけとふくひうけとふくひうけとふくひうけ
ようそあるそうそへしふ右のやくりうけとふくひうけとふくひうけ
まごろとつそあるそうそへしふ右のやくりうけとふくひうけとふくひうけ

常のごちの盃の External 公方様より朝日の節供三分の内祝の内如ひ

御前

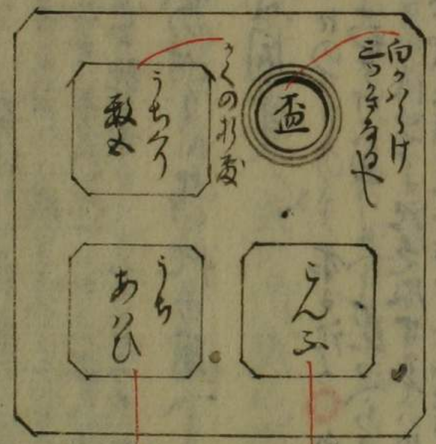


○右式三ツうちあひえんぶ角のかげ
もちろん数五つ
同断ゑんぶうちあひ右の盃のごとく二ツそなへ
いまも次の間も常の三ツ盃の間
也常と云ハ式三献了對
ふるまひ也

頭書 返礼

書礼来新しく外に書ゑ云
年始の出仕御祝の礼
順一番に此数盃ごと沢
大名又分格式ニ応
度ありて此盃ごとく

御前



のごとくいち上の盃より次第小ゑ也のごとく盃とゞめあとびの
前よ並べしのごとく盃三ツゞゝ中のびくよまで
なの形よ並べし

○右のごち盃ゞ書ゆハ公方様少ゝ朝日節供三分の内祝の内如ひ
大ゑ式三献の引ざまの往来のちよのごとくえんぶうちうち
ときてひきさゝゝとゆふ人ゆうごとくハ陣三ツ陣の内祝の引ざまゝ常ゆハ
ごとき一ぜんと引さゝゝとゆふてもあるごとく又大ゑ

御膳をすゑかまへとうちゝ時ハ御肴ハ何ニ而有ても汁ハ何ニ而有ても御膳をすゑかまへとうちゝ時ハ御肴ハ何ニ而有ても汁ハ何ニ而有ても

一、式三献のさかなハ鯉の洗ひ

一、式三献のさかなハ鯉の洗ひ

○式三献ありて式の御肴ハ鯉の洗ひ

○式三献ありて式の御肴ハ鯉の洗ひ

○式三献ありて式の御肴

○初献とは一番よめとする盃事をいふ
初献は必ず新婦より始まるなり本文に初献新婦
しかる○あつもの鯛如常うしほ煮あいのあへ
もの○新婦は服を着て同の者よりつぐ
あつもの者こすること鯛のうしほは煮て出すこと
それぞれあへ物ともにこぶのごとくに三切と別の服よのごとく
五切あるなり○ふた付とは一ち服のことをいふ
ふた付よりは一ち服のうつわものをいふ○二献
新婦のさかな打あわび○干あわびは
打あわびよりうすくけずりうすくして二角の
伝えるなり○あわびの打あわびとうあわびとは
六角のうすくして二角よりあつくして紙ほどに
さんとうすくけづりあわびなり○黄白赤白
ほどに順よくするこれ大まか服記なり新婦の
前は赤黄白の順よりするなり○三献
あひひれいするあひひれいとは新婦の服よりこやさ
るのきそくよりやや小さく新婦の服よりは
そくいさるの服よりそれよりきそくとさすこと
服よりの服よりそれよりきそくとさすこと
○肴は鯉なまり

二献の盃同中着いる物鯉如常洞て海老のあへもの
汁よし海月如常大ぢろ・よ入(しやよ入)
○二献肴盃同とは二献のの盃も肴よ同しくこと
洞とはあつものの吸物や鯉如常洞とうるおいの
にするをいふなまの者よりえそうあいのあつ
けるをいふ(しきりけよいたるその風
うつかと盃蓋をかるや○海老のからをむきて小上盛よ小石
びとうるやきりけもやるりとうるの名なり
ふいたるよりとりあへものなるなり
有(しやよ入)

三献ハ盃同あつもの后如常洞て(あいのあへ入)
肴をえらみて組ず(しやよ入)
ふもそうり

○股のこと刀めをいうる大くは入へ
しやよ入(しやよ入)
○二献肴盃同とは二献のの盃も肴よ同しくこと
洞とはあつものの吸物や鯉如常洞とうるおいの
にするをいふなまの者よりえそうあいのあつ
けるをいふ(しきりけよいたるその風
うつかと盃蓋をかるや○海月はさらして
びとうるやきりけもやるりとうるの名なり
ふいたるよりとりあへものなるなり
有(しやよ入)
○大ちろいはりけの名なり

頭書
巻初序成記云湯漬ハ引物ヲ入テ暖敷五ヲ与ル事ヲ云ヘリ

○三献めのゆ盃も茶よ同りニ入や○ゆのもそうろう新発意も嚊ふもか
まはとへそかりとけよへて但ゆるやあんざ注あまき附ハ注と入ろ〳〵きるや

三献の後供ゆ参る時よりて汁湯漬けも参りうい三度の
汁着ハ椀を奥おてんぎんおろ〳〵よまりうん
○供所ハ出仮や○てんぎんハ黒ろや酢よ茶注入すんぎりこりんむり
むざるものおりなる魚なこいてんぎんハ酒のさうるよるゝぬおるなてんぎん
の附ハ必ゑ〳〵着とゑ出して四盃ゑや按書よ供所ニて四盃ゑり四献ゑ
始ゑそうり〳〵ハ後ハ椀を奥おとうちろ〳〵ゑやとうりろ○

一 公方様ゆての一献よむど入四盃よ参ひすハ又初献のゆ盃そぶ仕元の内通ゑの
ゑ着などゑハ出ろうい又
ゆ方汁お参ひ

○一献ゑハ御膳のゑ
○汁盃の着ハ着るゑ

一 一献の時ハ生ゑのおゑ
出ひても能い〳〵し時宜よるべし又ろ〳〵けあきとしるけハ

○ど入の大ぢうのろ〳〵けよう三ゑう大ろるかりはゑ
○汁盃の着ハ着るゑ四の着ゑ着よ注ゑ

一 一献ゑハ御膳のゑ
出ひさもい能〳〵

○打ち生ゑの着のゑ
細い参い〳〵御ゑ奥ゑ

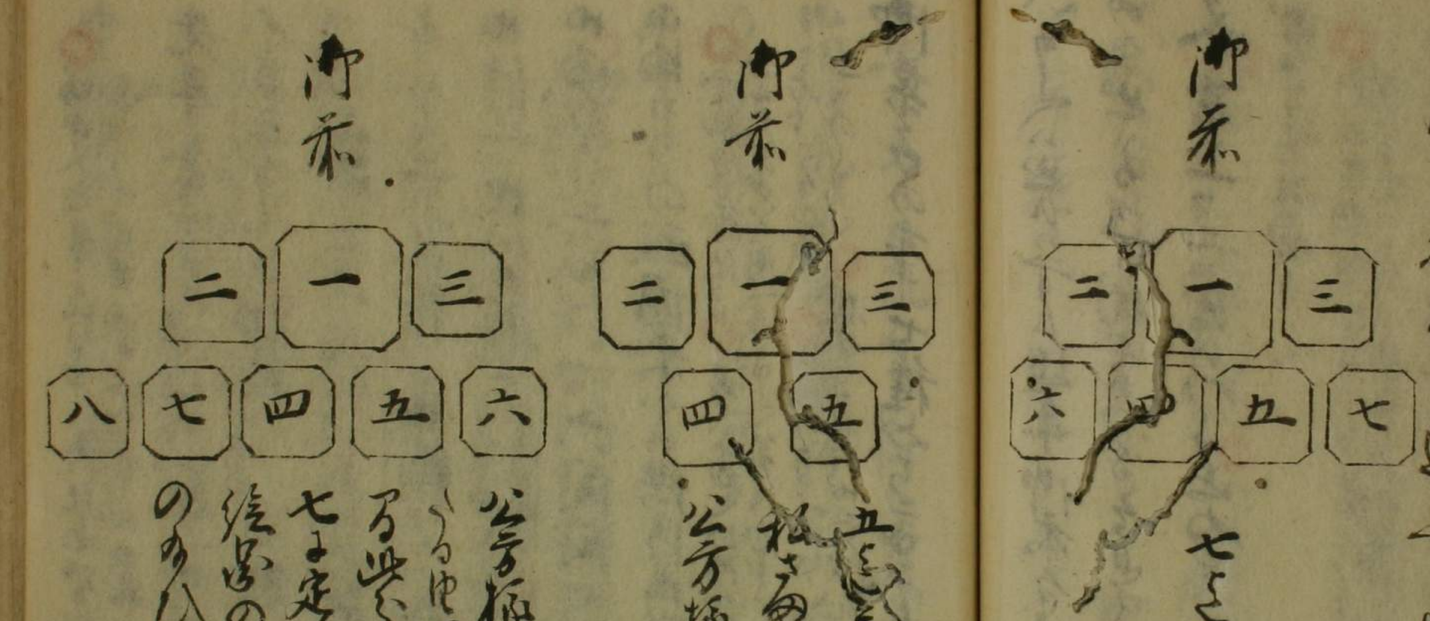
又着ハ一ツ二ツ出つゑ
出ひさもい能〳〵

一 毎年節分よ伊勢ゑ宮ゑ御師ゑ来ゑ〳〵も参い又盃の着ハ七八献
ふるりて同苗の元ゑ供ゑくゑ参ゑ〳〵御師ゑ附ゑ又ハ附
配膳とゑい又同附ゑ供所ゑ出て御師ゑ相伴元の出
同苗御後ゑ方よ宮ろうて出陣よのきと〳〵そと参りてふいと
てのうふゑよ〳〵と三ゑ着のゑくゑ〇ゑも仕い〳〵ゑゑ参ゑ
陣ろて還御ゑろうい定ろ〳〵ろ事ゑて

一 公方様へ七ツ半ニ而御膳も出ル相伴衆（三ツ半）ニ而御膳も三ツ半ニ而ハ

又ハ公方様へ参ル時ハ

七ツ半ニ御膳出ル相伴衆



一 御膳の事ハ前ニ記ス通り（ニ）公方様へ参ル時ハ

七ツ半ニ御膳出ル相伴衆

公方様へ参ル時ハ

七ツ半ニ御膳出ル相伴衆

公方様へ参ル時ハ

七ツ半ニ御膳出ル相伴衆

○七ツ半ニ御膳出ル相伴衆ハ伊勢守ニ而ハ（ゲジョウ）寝ル

同苗御役人ハ伊勢守ニ而ハ（ゲジョウ）寝ル

○七ツ半ニ御膳出ル相伴衆ハ伊勢守ニ而ハ寝ル

同苗御役人ハ伊勢守ニ而ハ寝ル

○此三ツ半ニ御膳出ル相伴衆ハ伊勢守ニ而ハ寝ル

同苗御役人ハ伊勢守ニ而ハ

○俗中入名常衣の事一茶に汇而皆別も有之候へ共古実汇に有の通の
必ひうて同苗俗中入名常衣の服七ヶ六ヶヲ七ヶ五ヶ（ら）也トアリ

先年金仙寺 貞宗朝臣 亭（御成の御時 御常衣 着ず）
大方ならぬ初献ざうふ 二献 さんらう又二献あり 三献
ならひ 三献ざうふにて供ぬ 三ツ肴 ○御引菓子
ありける二の御肴よ 御酒ひさし 五ツ出け 二ツ又二ツ出 御酒ひさし 三ツ
出け 二ツ中の御肴よ 御酒ひさし 三ツ出け 二ツ出け 一ツ 六ツ
御酒ひさしの数同ずひ 供応 御汁よ 出ス 当世
○金仙寺 東京にあり ○亭 茶の湯の客を通す座敷の名也 ○常の御膳 常の
膳ざるの事也 ○御酒ひさし 三ツ 三ツのもの ○同同 御酒ひさし 三ツ出け
御菓子の事七種ひさしの 供応 御汁よ 出ス 当世

ふへて 当ひさしの 瓜なとの 御肴よ 入てうやさしくもすゝめ
御膳は 元の御菓よも七種ひさしの 御菓子ゆへ 七種ひさしの
御菓子ありびやくしのさまざまひさしの 左なるべし
○御菓子の事 ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物
れ麦のつちとるく 仏ひさしの 御菓子 ○ちぐさ 諸国名物
ひつゝと入る ○ひさしの事 ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物
のこと 諸本書 ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物
ある也 女房四人の 天目よ 入るなり 三ツ出 ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物
すハ五寸三ツよ 入なく 削り ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物
御文の 仏さゝと云ひさしの 小刀よ ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物
小刀をゝてハ ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物
ひさしの 御肴よ 入てうやさしくもすゝめ ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物
御膳は 元の御菓よも七種ひさしの 御菓子ゆへ 七種ひさしの
御菓子ありびやくしのさまざまひさしの 左なるべし
○御菓子の事 ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物
れ麦のつちとるく 仏ひさしの 御菓子 ○ちぐさ 諸国名物 ○ちぐさ 諸国名物
ひつゝと入る ○ひさしの事

一 そうめん

欲 盛中 ○あげうどんは出しつゆにつけて出すなり

一 御成の時 進 ○公卿の間 ○きつね次第 ○献

亜相兼ね汎愛の恵も進物の垂布ハ庶人の為にも進物の垂布ハ庶人の為にも進物の垂布ハ庶人の為にも

元明天皇の代和銅年中比筑後國三池郡の人也名宗光也と云上の上作也
又七十二代白河院の代嘉保年中比同郡あり波多源也○久國八十三代
後多羽後の院の代元暦年中比栗田口の住人也上の上作也○国吉八十六代
同栗田口の住人也中の上作也○有国八時代同あり○国綱八十七代
住吉の住人也上の上作也○正宗八九十五代後醍醐天皇の代元弘年中比相模國鎌
倉の住人也上の上作也○貞宗八時代同あり中ノ上作也○国俊八
九十一代伏見院の代正應年中比京の人三条鍛冶と号す中作也○
国俊と一本に八國信と云う國信八九十七代光明院の代暦應年中比山城國
長谷部と号す下ノ上作也○包平八二条院の代永延年中比河内國の
人後に備前に住す中ノ上作と○則国八十六代四条後の院の代應仁年中比栗田口
の住人也中ノ上作と○国安八十二代後多羽院の代元暦年中比栗田口の住
人也中作也一本に安國と云う安國と云ハ誤
来上の上作也○菊あり八十二代後多羽院の名ハ治土人と
十四て禁中に書と称せしめ給ふ也てをカカと書ハ誤
とよぶ公卿初めて召れし時也後多羽院も同方よりをカカとうたせ給ふ也
卿初めて召れし時也後多羽院も同方よりをカカとうたせ給ふ也
ふ菊の花の紋を彫ようせ給ふ菊のすき也
公すき花形の数十二あり又枝菊もいう又彼菊と則宗とすき給ふ則宗も
是時の書振信の同の中一也備前國福岡の住人也上の上作也則宗
の名と彼りかうと則宗う同作の私の名ハさき表の同貴元の上ノ則宗作と
うり上の同作ハ則宗とそうり

人の相性之事

一 人の相性のよき人の家ハ代又何のよくハあの
ようりのよき所を立てかくべし悪きと
ふしく但主君或せごくは代々ともに
ものと云てもくべし時宜
して立てかくべし代又さるをあの
して立てかくべし代又さるをあの

頭書
奥板記に云夫人の茶
ゆえ食の物椀ばかり
かりさもさと云て左の
ようにおおきと云さの
間さ作りてさいともす
用さこさつきんりまた
人の方の包さと云ふ
ことなり

うけ湯とのこ茶と重ねて出す夫人と又合せ夫人より先あいさつ
べくんば茶と重ねて出すもはじめ
◎あのとうりにて八服ありても服のとりさこと
古い夫人の中茶にて八方のこさと云てあるとは茶にて八こさと云て方の方と云てある
とあり又茶の後膳にて台あるものを出してやくしんと云て
出てくるこさと云てこゆりてやくしんと云ふ
◎夫人と又合夫人より先あいさつ
何のもまた人と又合て夫人は
我も膳とくしめさせさも
膳るものあればいと
◎茶と重ねて出すもはじめ又夫人茶
先に茶と重ねて出すよ我一人ばかりとも云ふ

又中酒もかくごとくにて引さげようけてしまいて人数
うけて後夫人より盃とのうちを
人をも又合いそで包みせよのむい狼藉なるべし

◎中酒ふ服の湯とつまごの肴を
盃一つめくる川や
又盃ひいさ一汁五菜なるべし
うす又盃と人のさいひ
してこなさかも
事もいろうやまいものや
を人前人の茶にて心まて
人よりこや去る椀小去る
ひいけとあけひてのこひし
て又及いずひつる但
い団舎にてよくあるうち
◎さし汁よのこんにゃ中酒のはくさんにてく
大盃の時よ盃一つ出て上元うのこて膳く盃を次て
◎中酒ふ服の湯とつまごの肴を
盃一つめくる川や
又盃ひいさ一汁五菜なるべし
うす又盃と人のさいひ
してこなさかも
事もいろうやまいものや
を人前人の茶にて心まて
人よりこや去る椀小去る
ひいけとあけひてのこひし
て又及いずひつる但
い団舎にてよくあるうち
◎さし汁よのこんにゃ中酒のはくさんにてく
大盃の時よ盃一つ出て上元うのこて膳く盃を次て

一

人の家にて飯くひ茶のみ酒をのみ又合てくひ〳〵しかの笑とをいふ
せうとくひ又やきあるものむしやくとも遠
るけさいとそれあとこゝろ〳〵などいふ事又かの
ありあとそれくべし又
ちうなどいふ事ある人の
りそぬるべらるゞの陣

次第のしなにて
そ
ふ
ま
ま
ま

（頭註）
○湯漬の時は少しさゝき、昼の食の時は食ふてより後なり、夜食の時は食ふてより前なり、

湯漬のはけ（れ）は飯よりうすくして腹脹よし（れ）又云湯漬は川狩又は一ツ物又は湯漬のはけも必ずよし（れ）ぬるき湯よし（れ）ぬるきは常よりも多くくふべきなり○

又さいさんざいと云ふ家よし（れ）ありてけ（れ）ふて又ふるまひて出す時さいさんざいと云ふ家よし（れ）ありてけ（れ）ふて又ふるまひて出す時さいさんざいと云ふ家よし（れ）ありてけ（れ）ふて又ふるまひて出す時

○

門跡坊官門跡ハ三方指家大臣門跡の門相伴の事
の門相伴ハ有之一門跡も没義と雖上人ハ云ふにおよばず
家の門相伴のハハ公方指家ハ公方相伴
武家ハ是又門跡ハ門跡元又長老ハ門跡の門ハ公方指
ハ門跡ハ有之ハ指家ハ公方指家ハ公方指
食寺（しき）（門成の門のごとく）
食元如此ニ候

○指家門跡の事

右者門跡ハ是と云ひ公家と云ひ門跡ハ三方指家ハ門跡の事ハ公方指家ハ公方指家ハ公方指家

よもやまばなしけり又ふりん

○近頃風一条風ハ楊家之楊家よりさきそれ[illegible]

○従大寺風元山従風楊従楊風ハ従元の事

○従上人ハ正位五位少て楊中の中風（昇

るとのる事也ふる人と云説ふり

元大作元大作右大弁大作大弁言中納言参議の弁言元大弁右大弁元中弁右中弁

元少弁右少弁大弁氏大弁氏少弁氏のふり元大史とりふり

汝人も各二人てあり三位元大史二人の内一の元大史のみを官務と云

○興第ハ楼観の門医師興第ハ医師よ和気丹波

のある家ハ今の半井丹波ハ今の半井家也

三代禁裡のうらうら和気ハ今の半井家也

古位油小路より油小路ハ今ハ油小路

少納言ハ賀茂氏也今ハ勘解由小路

幸徳井と号ス○賀茂氏

侍ふり五位六位の人也五位ふり上ふらぬ人也

禁裏の中風昇らぬ地下の人ハ正位ふり上ふらぬ人也

ハ名家ハ儒学の家名家ハ羽林家ふりてハ

義満公のほか善恵院日野大納言

ふり威勢ふり

有ふりも大作ふり名家ふり

○同西風ふりハ三条西風と云ふり

○従上人ハ正位ふりハ従元ふり

三位ふりて大中納言ふり

ふりふりる家ふり○羽林家ふり

る家風ハ羽林名家ふりの

山城国綴喜郡男山石清水八幡宮の別当ふり将軍義詮公八幡（石清水

結ぶる）きりて善恵寺通信法華ふり

智中四記ふんえんふり

ふりて有ふりふり威勢ふりふり

しふる時ハ必放けふ風ふり

武家参会の事細川風ふり

石馬ふ風ふ波風武田風ふ令仙寺大名の門前ふり上京豊来

浜（ハウカ）伯部多賀豊後陶（スエ）周田杉浦上ふ

名ふ参会の面ふ公家元弁風ふ中納言風ふ

時三方ふりて正胎と洞ふ

の如くふ分ふりて正ふり又あつひふりふ又ふつふ

行ようら〳〵いて七ツ〳〵せひし九杯のはも人の肉元氣沢
田楽猪鹿汁ともに椎(ユウ)人同前よろしうめやくい
○細川浅倉山殿へ三献の祝ニ而ハ三献目ニ吸物出ル式ニ而ハ細川右京大夫殿へ出ル式ニ○二汁廿六菜赤紅後一色後ハ四拵出ル○今伝寺ハ伊勢守殿へ来ル御上洛ニ而ハ赤紅後の肉元ニ○上京ニ而ハ赤紅後の肉元ニ○多賀豊後守殿へ来ル時ハ二汁廿六菜赤紅後の肉元ニ○多賀豊後守ハ三汁後ハ三倉後ニ○黄汁ハ赤紅後の肉元ニ○後中飯之後ハ三倉後ニ○黄汁ハ赤紅後の肉元ニ○陶屋伝兵衛少て振舞ニ而ハ大内後の肉元

上よりうちこぼすと云へり○茶の葉を入て煎じ
らるゝ也と一つやうに天目も茶碗と入て煎じ
と一つに云へり○又ねたう云ふ物を入て湯と入る口よき茶せんとさゝ
ねて湯と看よ入てそと引てことさら也喝食小僧の
汲やうに立ずく茶せんとあげん時も長老の茶を
いれのごとくそそぐ也○天目も盆をねて出すのよく
人〳〵の前へ行〳〵茶の如〳〵そゝぐ也○天目も盆をねて出〳〵と云て出す武家にて詫(トキ)の時も
同茶と云ふ也○喝食(カツシキ)小僧の
又菓子盆よ菓子と入る事ハ暑後也
○建盞ハ茶さん〳〵茶と記す○長老和尚や茶と記す○菓子の盆ハ
多く客ある在の大なる杉盆なる〳〵し○茶と入ていひき茶と入や○たうしんハ

一

點心(テンジン)のうち朝よりひるとやうにまんぢうなどやうの一献るなどの時ハ何の時も
即點心とやう朝點心とりつゞきたるものハ少ずゝ
○朝ハ點心と云昼ハ頭(ひる)と云流布用ゆ何時も点心とも公方様へ
参りまるもせ〳〵上ハまんぢうなどとうす
點心の為に粘(ネバ)そゝ禅僧作斧(サゼン)などの時のうまゝ朝よ
薬(クスリ)と云ふしハ粉(こ)也麦(ムギ)と引〳〵ハ頭
ちうハ饅頭よ入ハ武家にても作斧の時ハ同茶
○薬と云ふもひよハ粉薬と葉煎よ入てちやうじと一ツに煎じてちや
うとんと盃よ注て出すなり○薬と湯よ入たてゝ呑也薬とた
うと云ふ湯の字ハ本名ハ集香湯(しつかうとう)と云ふ負助返者書よ云公方様相国寺を
へ御成の時随分の御点心の時ハ先湯出るハ粉薬ハ入ぬハまんぢうハ

湯漬也○ひるなどの湯漬ハ
同茶と云ハ誤(あやまり)○侘と招き飯と引ハ暑後也と云ふ○菓子盆ハ入
も草庵のごとの形黄ハあるや
○天目も建盞よ同〳〵○武家にて詫の時も
同茶と云ハ誤(あやまり)○侘と招き飯と引ハ暑後也と云ふ○菓子盆ハ入
も草庵のごとの形黄ハあるや

糸ニて又尺素往来ニ云點心ハ先ッ點ジ集香湯而後砕蹟糟雞ニて右の湯の薬方或書ニ云苦參、肉桂、白朮、丹草、蜀黍、右粉よりも蜀黍いもろこしニ是ハ入ル也さるもの也とニ拵るよし然ハ脾胃と補ひ腹中とをこやすよし然ル功能ハ乍去先字初よし然ハ薬と腹して腹中を能く調て拠所なと食する心○麦ハ麦ハ麦と云事歟小麦の粉ゆて細く篩のごとくこしらゆるを云やむぎなどと云やむぎとハ云なり

麺ぢうのくひ杜一ツ

ちうの上ニ垂て有ゆへし苦しからすハ

ニうもくふゆへし又作善の附ハ俗ちいさごのごとくちぎりて

右の皿よりと垂ひ又ハ皿も麺ハ麦いあげ麺ハ拵よ

入ル也ひ又ハ拵よ湯ちうニ入ル粉よ炭ゆへし三ツ有ゆて

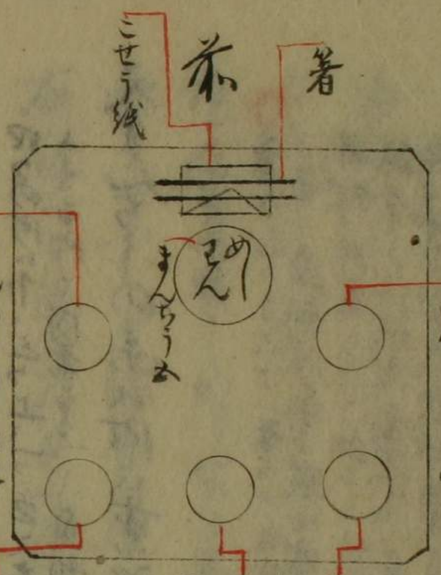
ハ入ル一ツ上よりきると炭の定て炭遠ゆへしてゆへ

○有ゆへよふまふこ○さごの事ハ麺ニも俗ハさごとをゆゆ因有ゆへ垂るそうめんと腸とをゆるゆ因有ゆへよ炭ゆへし一献の附のまんちうハかりゆへけりもる也ニ一ツ垂ニ三ツ上ニ一ツ垂ニ有ゆる附も因有ゆへ○あげ麺ハ拵よ入ゆへし腸をこゆへる○湯ちうニ入ル粉ハ入ル也又ハ拵よ湯ちうニ入ル粉よ炭ゆへし三ツ有ゆて又ハ入ル一ツ上よりきると炭の定て炭遠ゆへしてゆへ

又ハんちうの糸ハ附ハ薬を云ゆへ

ふ不炭ゆへ

○薬を云ゆへハ糸ゆも云如く粉落との因有ゆへ○さうけいハ糸ゆも云如く粉落と書ゆ庭訓往来ハ點心有水繊温糟糟雞と云ゆ又尺素往来ハ砕蹟糟雞と云ゆ又尺素往来ハ點心有水繊温糟糟雞と云ゆ詳ゆへニ仍之金地院ハ尋ゆ問ゆへしまゆ者ニ云煎點式ニ有ゆて即チ研蒻蒻ハ以淡醤油ニ煮ゆて黄ゆへ云ゆ味ゆて云ゆ也ニハ合ハんゆくと切てうちまぜゆへさうけいと云ゆ也ニ薫點式と云書ゆへ云ゆへ



まんちうのこきりあ二ゑ一ゑゆでもあ若い八二ゑを
汁へ入〳〵し但入いぬも悪い若き人をゝ入い
ぬも能いこうをゝい香のあをとともさいの
松よまんちうまんひをへうも能い若き人いめく
をへうす

○麦のこきりあ右ゟあらけ
あをゝ中こでう
すさいまんちうのすさいあ茶も麦
のすさいぢるへしすさいいくいあは
又ゟんちうのすさい右も麦のすさい
たよるへて亜も云又ゟのけいすき
いもこもちやくん皿よ入いよも云
○麦のこきりあきんせうたせうが
右ひんゟん中むきのをるけは皿を
たへのけて麦ゟをへうす

（頭書）
麦の物ハきりあの
ゟまて

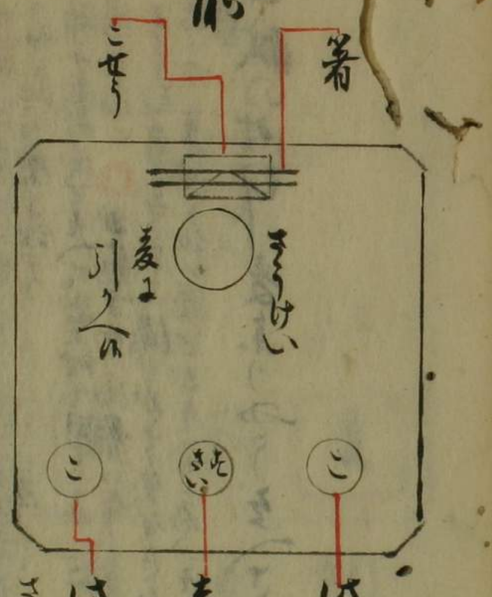
○まんちうのこハ麦のこなのこ
ねん又ひし志ゐうがさびをど
あんゟんなもゟひて用ゟ史○
のの皮をどゝ細よききし二ぞう
そりをうつをゝ一の如くけづるゟ
とぞ又をゝ柚のきざこうをいう
てかのあとも吸口のあをとゝいそう
さく切て亜史あをとゝいそうゟ
えそう又或書よ云亜分のけ
○しそいうゝしの葉史をゝ
うんゝるゟ入てゟうてさゝ史
のゝ史ゟきあいも○をゝうよ
のひるどゝ切て膾よゝ
黙心之菜 猪不要多矣 生薑 雞冠苔冬瓜藕根薑荷酸蕗等肴
三種斗りすゝ設之とゝろう○けとゝ
ちうをゝふう○こせうハ麦のけけ〳〵入るゟ

汁へゝと入い程よ箸ねるうまんちうをゝうい丸のくるを
亜て右のくるをゝ左へゝをてくふ〳〵しことゟ
〳〵しまんちうい板松よ入てけ松をゝてくよ〳〵そのけ

椀もて汁を注(つ)しあるき人などへ汁を出(だ)すも能(よ)きことも入(いれ)ざるも其(そ)人の意(こころ)次第(しだい)なり○本膳(ほんぜん)の時(とき)は三位(さんみ)の人(ひと)盃(さかづき)をおえて出(だ)すまんちうを麦(むぎ)のけとうるやまんちうの麦(むぎ)のけの入(いる)汁椀(しるわん)を脇膳(わきぜん)乃人うる角(かど)

○汁(しる)ごと入(いる)汁(しる)よき汁(しる)椀(わん)と入(いる)ひおうるもの(椀のまんちうと云(いう)ことこれなきやうよと云(いう)あんどこれなきやうよと云(いう)者(もの)なし

一まんちうのるきけも麦のるきけもさうけいよりきく(ゝ)



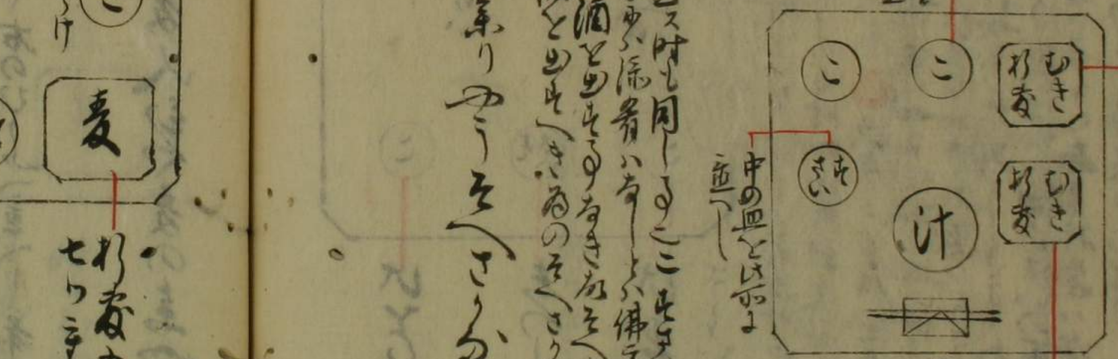
○まんちうのるきけもよき汁椀(しるわん)をうけ○さうけいのるきけも麦(むぎ)のけ茶(ちゃ)に汁(しる)しるけよき椀(わん)しるけ汁(しる)椀(わん)一所(いっしょ)に池(いけ)之(の)ごとく三(さん)ふ(ゝ)と用(もち)ゐ(ゐ)○三位(さんみ)同(おなじ)ふ(ゝ)る汁(しる)は三(さん)ふ常(つね)は一ふ(ゝ)也(なり)

中(なか)のさい(ゝ)ごとく左(ひだり)へ(ゑ)る(ゐ)○しよくは四(よん)と中(なか)のさいの西(にし)へ(ゑ)直(なを)し麦(むぎ)わりあと生(なま)(ま)せ右(みぎ)のさいの椀(わん)のうさいのけもうよもつうりあり○亜(つぎ)相(あい)脇(わき)ぜんよりさうめんくひたのさいの茶(ちゃ)へ(ゑ)やりて右(みぎ)のさいの汁(しる)をやりて右(みぎ)のさいの汁(しる)をやりて右(みぎ)のさいの西(にし)へ(ゑ)直(なを)し麦(むぎ)わりあと生(なま)(ま)せ右(みぎ)のさいの椀(わん)のうさいのけもうよもつうりあり○亜(つぎ)相(あい)脇(わき)ぜんよりさうめんくひ

一献のけも麦糸りやうあるやう

○ひきふくさうめんのもの
糸うもりこと〳〵くひ
ひきめるひきふやう麦の
ふりひきわり麦と云
てふりちるのわり麦よ
そとこまんとち
大皮めるわりよ
仰るこをかし後
とりわや敷ハ三
そ又いかきこさうい乃
のけもうきけいふ
くめる汁も常こ初う
脂よ麦わり麦とをへて出す時も同しすこ
同しんく○出家方ハ流者ハ常こ
まりるめ〳〵幸ありて酒とをそのすき
ちすをくさるあい酒とをへきるのそ
一献のけも麦糸りやうあるへし

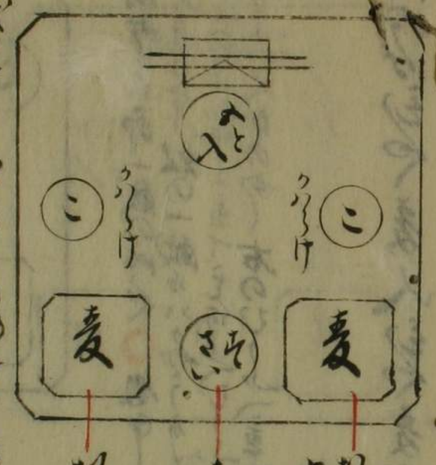
右の皿をのけくるあとへ
麦わり麦とすへしすなわや



右の皿を
いかに迄
中の皿とをふよ
迄へし

むきわり麦と一つくうて
はあとよ迄てくひてをからきうる
わり麦のとよ又むきふのわり麦と
迄てくふりねくひとそあき
わり麦とをのやくむきふ〳〵迄て
むきふくひのこりくるあとき
あらとをとよあきあきとう
さく迄や

糸

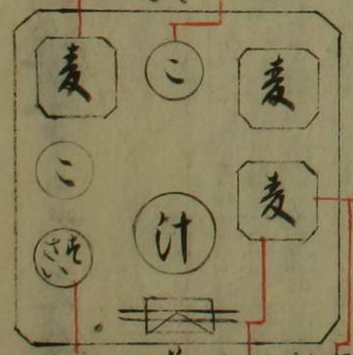


○一献の時よい出家方の仏善ゆていかなる
ものよとも汁ものこも汁等もはうくけこさ
いおの皿花おうう
うる和物又別よ
後ものとうくけ迄

○又ハ吸あとよ
別の脂すの迄て二
の脂のおくすする
又もり麦の脂よ
迄るもりう

右のことはふよ

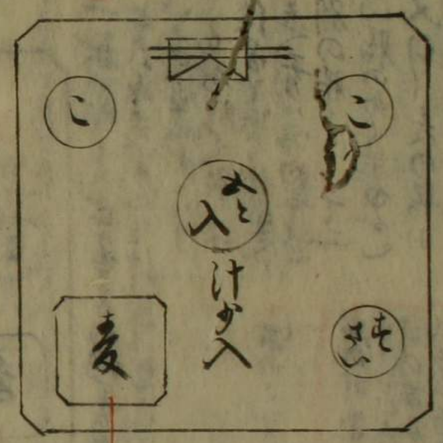
右のわり麦とくひ
くふいたのわり麦
汁の右よ一つうえ
てくひあきあ
ものよく迄へし



右のこと
あとむりの麦
わり麦とめ一つて
うり迄へ
むりの麦わり麦を
はあとよ迄てくふや
竹糸のやし

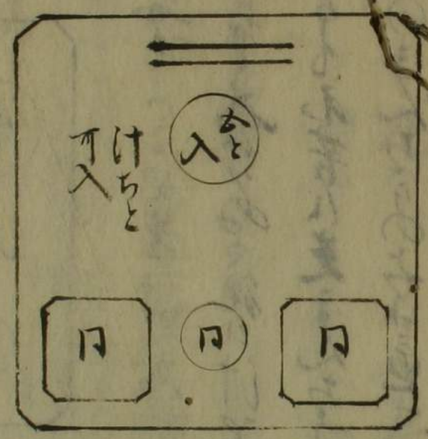
中のそさいを
ひかよくへし

一 同時もし麦ふうりを但麻中ふそいふ及いふすん



わ麦ふまい又こまいまぬ〳〵し

一 同けふる三や麦又三や麦の



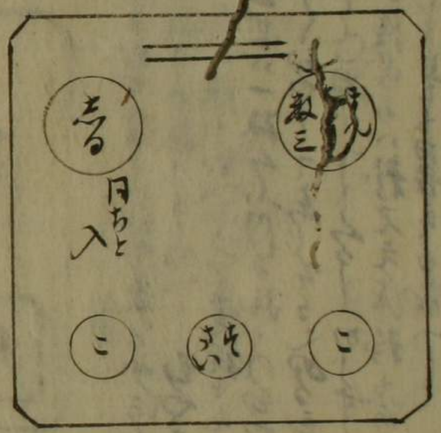
ふる三やしきの けふ三ねもふねも
三ぬ〳〵し 三やしきの けふ一まい
ある〳〵し

○同けふ三や一献の時や ○麻中ふそいふ及いふすん 見及ふす私の一献ふハふうりもする や ○ひまいのけやうふ右の杯とむ ふのまん中よ立てを行とへびうふの麦ありきくと一つてふ立てくひそ たくふ又ふの如く右のむうふ〳〵立へし 茶の往ふあてとる〳〵し

○ふる三やくふ麦ふ三や麦とふいふ三ねもふねもまぬ〳〵し 三やしきの けふ一まいある〳〵し ふの杯よ酒ふ三へうと貴様とふる 出せぶ一ねくふ門よ踊りの三やくふ麦ふ杯ふ三ねもふねもかまへて 麦ふ三やしきふ麦ふ杯ふ三ねもふねもかまへて 三やしきふ麦ふ杯ふ三ねもふねもかまへて 三やしきふ麦ふ杯ふ三ねもふねもかまへて ○同ハ三やしきふそいふ麦ふ杯ふ三ねもふねもかまへて ○同ハ三やしきふそいふ麦ふ杯ふ三ねもふねもかまへて ○同ハ三やしきふそいふ麦ふ杯ふ三ねもふねもかまへて

一 同村まんぢうの正ウ松之（者ある）ゝし

米



久ひさうにて之ハ（入）ゝし又入ハいかゞもふ若ふあき人なとゝ
仰とおく入ハいかゞもすひいかゞもふ若ふ筆ハ何と
さるも不若ふ先まんぢうを一つ先てあ（ゝ）ろうとそ
跡りのまんぢうのよふ亜て久ふ（ゝ）し又跡りとも久ひさくハ

久ふ（ゝ）丸ゐ（ゝ）く丸ゐ（ゝ）ふも不若ふ筆字なとゝふ二つも久ひさ
いの（ゝ）（ハ）ゐ（ゝ）ふまんぢう先（ゝ）ハ神紙と引きるとていそハ跡りと
ほくこそ懐中せよとの
ゐる人なとゝふ跡りとゝ丸ゐ（ゝ）ふ懐中せらくるもの

○結ゐ文よ同ちと入とある之ハ先ゐ懐中せよと
のゐくふの都ゐ文と出（ゝ）ふ（ハ）ゐ（ゝ）ふまんぢう也ゝ跡りとゝ
まんぢうのうらく（ゝ）ゐ（ゝ）ふ但庵のまんぢうハ牛の肉羊の
肉をとゝふんよ（ゝ）（ハ）てこそ旅まんぢうのゐひおうとほくひよ
古のまんぢうのゐろ（ゝ）（ハ）ゐ（ゝ）ふ受（ウリ）とよくろふ○ゐ（ハ）ひよびよ
久ひてもゐんぢうのゐろ（ゝ）（ハ）ゐ（ゝ）ふ
ひろ（ゝ）ゐ（ゝ）ふ右の家ハまんぢうをゐ（ゝ）ふ
二条良基公の四訓也その教令
甲文ハのゐ（ゝ）ハまんぢうをゐ（ゝ）ふ右の教令を
そもの内ハまんぢうをゐ（ゝ）ふ（ハ）ゐ（ゝ）ふ
一 さんがうぜんのゆうし（ハ）ゐ（ゝ）ふ懐中ゐ（ゝ）ふ
見及ハいりびい大方ひくふ先ゐ季のこと化る一事と跡りて

三季と似りふる也（ハキヨゲンザイミライ）
ゆゑ（て）仲秋なれども去歳五月末方ハ三季
ゆゑ（て）仲秋なれども今ひ秋ハ四季ゆゑ（て）余の三季と
句ゑ（て）ハ四季ゆゑ（て）ハ仲秋ゆゑ（て）ハ去又ハ三季
ゆゑ（て）ハ仲秋ゆゑ（て）ハ今ひつる秋ハ三季ゆゑ（て）ハ
さもひてほ秋ゆゑ（て）ハ笑ひ
○さんりうせんハ三峯ハ三つの峯ともいふ（ハ）山
のことの形と三つ似りふるゆゑ（て）峯ともいふ（ハ）山
とかくるごとくふるゆゑ（て）峯ともいふ（ハ）山
三峯ハ仙人の住しゆゑ（て）仙人の事をも含そだむ（ハ）形容
といふ句ゑ（て）ハ三峯ハ仙人ゆゑ（て）ハ三峯ハ仙人ゆゑ（て）ハ
ま（ハ）ぢる也一部ゆゑ（て）ハ一部ゆゑ（て）ハ
○ゆふ（ハ）ぐれの白々のこと
○ゆふ（ハ）ぐれの白々のこと
○ゆふ（ハ）ぐれの白々のこと

よ（ハ）ぐれ（ハ）きりぎりすなどゝなくゆゑ（て）ハ
ゆふ（ハ）ぐれの白々大ぢうのうりうけを出ゆゑ（て）ハ
ゆふ（ハ）ぐれの白々大ぢうのうりうけを出ゆゑ（て）ハ
○ゆふ（ハ）ぐれの白々のこと
○ゆふ（ハ）ぐれの白々のこと
○ゆふ（ハ）ぐれの白々のこと

夏

秋赤ハ山ノ色白
夏山現在ノ色赤
春ハ去山ノ色青

秋

冬赤ハ山ノ色白
秋山現在ノ色黒
夏ハ去山ノ色赤

冬

春赤ハ山ノ色青
冬山現在ノ色黒
秋ハ去山ノ色白

此時ハ冬ニシテ
夏ハ現在秋ハ未来
春ハ已ニ去ヨリ
:

此時ハ春ニシテ
秋ハ現在冬ハ未来
夏ハ已ニ去ヨリ

此時ハ夏ニシテ
冬ハ現在春ハ未来
秋ハ已ニ去ヨリ

春

赤 青 黒 人赤

青ハ春ノ色今春也
赤ハ夏ノ色夏ハイマダ来ラズ
黒ハ冬ノ色冬ハモハヤ已ニ去ル
●秋ノ色白ヲ不用

秋

人前 赤 黒 白

白ハ秋ノ色今秋也
黒ハ冬ノ色冬ハイマダ来ラズ
赤ハ夏ノ色夏ハモハヤ已ニ去ル
●春ノ色青ヲ不用

夏

人赤 赤 青 白

赤ハ夏ノ色今夏也
青ハ春ノ色春ハモハヤ已ニ去ル
●冬ノ色黒ヲ不用

冬

人前 黒 白 青

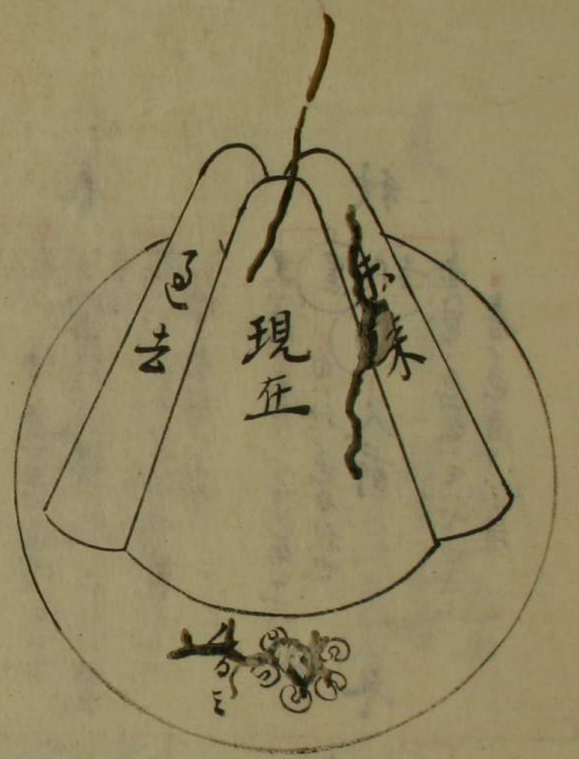
黒ハ冬ノ色今冬也
白ハ秋ノ色秋ハモハヤ已ニ去ル
●夏ノ色赤ヲ不用

●右ノ図ハ一年ヲ四季ニ分チ各季ニ三ケ月ヲ配シ各季ノ色ヲ以テ之ヲ表ス即チ春ハ正月二月三月ニシテ青ヲ以テ之ヲ表シ夏ハ四月五月六月ニシテ赤ヲ以テ之ヲ表シ秋ハ七月八月九月ニシテ白ヲ以テ之ヲ表シ冬ハ十月十一月十二月ニシテ黒ヲ以テ之ヲ表ス

●一本ニ山ノ色春ヲ青夏ヲ赤秋ヲ白冬ヲ黒ニ配シ四季ノ間ニ各土用ヲ置キ土用ハ黄色ヲ以テ之ヲ表スルヲ初中後三季共ニ各十八日ヲ以テ定メトスルモ春ハ青夏ハ赤秋ハ白冬ハ黒ニシテ土用ハ黄色ヲ以テ之ヲ表スルハ如何ニモ不都合ノ感アリ故ニ土用ハ春夏秋冬ノ間ニアリテ春夏秋冬ノ各季ニ属セズ春夏秋冬ノ各季ヲ結ビ付ケ又ハ離レ離レニシテ各季ヲ繋ギ又ハ離ス媒介ノ如キ者ト見做シテ左ニ表ス

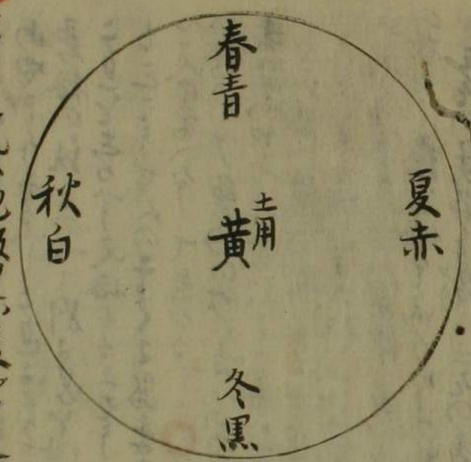
土用

黄



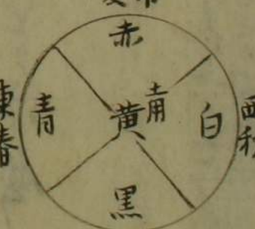
○右の如く三世とくりけはすりうる所也○過去と来るをうけておそ汁とかく（しよふ汁とうけするや奉公人飯汁ことわ家名にかゝはりあしきゆへ汁とうけてすゝめるとうけたるかくのごとし

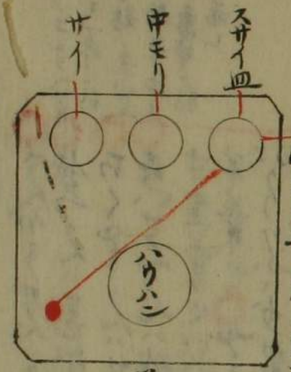
一そうもんのこ



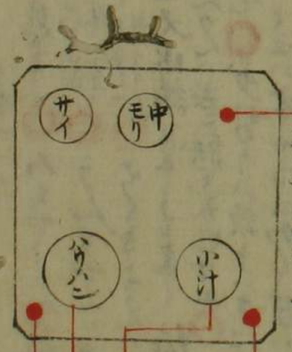
そうもんのこ亜麻の皮の上よこ亜や粟抔ももするや信濃

○そうもんの皮ハ包皮也小麦をこうすれハ皮ハ綿実ニ而包皮のごとくすくうもきの如くうちてゆるくふせんとうねいとなるへしこの皮又の名もあり（ハ）ゑの如くにして集養ニよし）先九のごとくして脈のすこしくゝ度うさと右の包皮のうことくうさの中よりうそとくゝ度うさと○て亜ハ包皮よりうさの中のごとくゝ度着と重して脈よ亜ハ着のごとくして汁とうけて脈よすへて左右と見合して何れも汁とうけらるゝ





前



けんこんさたうもうん　かうりんを

うんぜんまんぢうそくん亦又熊掌を

思ひ合すべし　扨此行有事

頭書　追記ヘッカンノコトヲ（ヤウ）

揃立ノ山ノイモ一升ニ砂糖

椿ノ仁コト粉ニ赤小豆

モ外小麦粉五タテ

合セムシテ亀甲ノ形

ニ切リ色赤シ

一

○さんがうぜんハ三山峯尖也前ニ見ヘタリ○ぜつくんハ甚驚（ビツクリ）異義ある（し）ニ見タリ○ちくさうくんハ筍羊羹義ナリ○せんくんハ碎鱠義也日上○けんこんハ羊羹義也○さうくんハ羊羹義也○ぜんぢうぜんハ巻餅義也日上○さたうさうくんハ砂糖ばうりふかな形ニ切ル也○ぜんぢうぜんハ三山峯尖也前ニ見タ